東方不死鳥伝

るーか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方不死鳥伝

【Ｎコード】
Ｎ９５７２Ｖ

【作者名】
るーか

【あらすじ】
紀元前の時代。
とある村に青年がいた。
其の青年はある日、とある人物と出会う。
そして物語は動き出す。

これはよくある主人公最強系です。
独自解釈や、色々あるのでそう言うのがいやな人はブラウザバックを推奨します。

九月二十四日話数表記を変更しました

零話　出会い（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

零話　出会い

なんの変哲も無い村があった。

その村の外れにある、小さな家にはとある青年が住んでいた。

歳は１７～１８前後と言ったところだろうか、髪は黒、目は紅と言った。少し変わった容姿である。

顔は１０人中６人が振り向くレベル。

名前は不知火　灰　しらぬい　かい　である。

そんな彼は今、山で遭難していた。

「あー適当な道来るんじゃなかった・・・」

寒い寒すぎる、死にそうだ・・・

「ヤバイな。これ下手するとここで死ぬんじゃ無いか？」

弱気になったらダメだ直ぐ終わる。（生死的な意味で）

「寒い・・・ん？」

ふと視界の隅っこにお地蔵様が見えた。

ちょっと気になったため、近くに言って見ると、そこにはポツンと一つだけお地蔵様が立っていた。

「何で一体しか無いんだ？」

当然な疑問をぶつけるが返事するものもいないのでその一言は消えて言った。

さて、行こうか。我が家に。

「でもまぁ、ここであったのも何かの縁だろう。雪とか取っておくか」

俺は、かじかんだ手でお地蔵様の雪を落とし、自分が着ていた、上着をかけて、家に向かった。

閉話休題

家に着いた、お地蔵様に上着とか渡したからかな？

「いい事したら帰ってくるって本当なんだな・・・」

しみじみおもった。

そのまま、寒かったので風呂に入りその日は寝てしまった。

戸を叩く音で不意に目が覚めた。

「うー今開けますよー」

ガラッと戸をあけてみるとそこには緑の髪をした女の子がいた。

「えっと。どうしたのかな？道に迷った？なら帰り道教えてあげようか？」

戸惑いながらも聞いて見た。

「いえ。迷子では無いです。私は昨日あなたが上着をかけて頂きました、地蔵です」

・・・空気が固まった用に感じた。

この人はアレな人なのかな？どっかの電波を受信しちゃった人なのかな？

たまにいるんだよねー、こんな感じになる人。

いい治療法な無い物かね。村にもたまにいるしな。

「あの。聞いていますか！」

「お！？　すまん、聞いてなかった」

「ではもう一度話しますよ」

彼女はそう言って俺に色々話してきた。

割合で言うと説教8割必要な事2割と言う、こいつ説教しに来ただけなんじゃないのか？と思う時間だった。

来た理由を要約すると恩返しらしい。

「願い事ね。特にないな」

「え！？　無いんですか！？　何でもいいんですよ？」

「だってねー無いもんは無いし・・・」

「そ、そう言わずにお願いしますよ。」

と頭を下げてくる地蔵様

「あ！ありましたよ一個だけ」

「あったんですか！？」

「じゃあ言うぞ」

「はい」

「俺の嫁になってください」

俺は右手を出して、言った。

・・・もちろん冗談だが。

「って言うのは嘘です！まあ結局一個も無いんですがね」

「・・・に・・・ます」

「はい？」

「あなたのお嫁さんになります！！」

そう高らかに宣言したお地蔵様であった・・・

零話　出会い（後書き）

髪が緑で地蔵と言ったらあの人しかいませんね。

と言うか時代設定がよく分かって無いんで間違っていたら訂正お願いします。

誤字も多いので訂正お願いします。

感想待ってます、感想があると作者のやる気がアップします。

壱話　新たな生活（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

壱話　新たな生活

「え！？」

「何を驚いているのですか！私はあなたの嫁になるんですよ？」

えっとどういうことだってばよ・・・

あれだよな。

俺、地蔵をきれいにする

←

地蔵、恩返しにくる

←

俺、冗談を言う

←

今、地蔵が嫁になると言ってる。

どうしてこうなった！

いや、ね。原因は俺だろ、それは分かってる。

普通嫁になってくれって言って嫁になる馬鹿はいないだろう。

まぁ今、前にいるわけだが。

さすがにね。これはダメだと思うんだ。

俺としてはこんなかわいい子が嫁だったらうれしいさでもね。

さすがにダメだと思うんだ。

だから、俺は一つだけ言うんだ。

「せめてお友達からお願いします」

土下座をしました。

閉話休題

説明が面倒だったわけじゃ無いんだからね！

・・・変な電波を受信してしまったようだ。

とりあえず、誤解と言うか冗談撤回した。

「仕方ありませんね。じゃあ友人でいいです」

「ああ、そうしてくれ。そう言えば名前聞いて無かったな」

「俺は、不知火　灰だ。よろしくな」

「私は四季映姫です。ええ、よろしくお願いします」

「で、四季さ「映姫と呼んでください」映姫はどこに住んでるんだ？」

「どこにも住んでいませんが？」

「へ？」

いやいやありえないでしょうに、家が無いって

「私は先ほどまで地蔵だったのですよ。家があるほうがおかしいでしょう」

「あー確かにそんな設定ありましたね」

「設定じゃありませんって！！本当に地蔵なんです！」

少し怒らせてしまったようだな

と言うか本当に地蔵なのだろうか？

あの灰色の石がこんなかわいい子になるのだろうか？

まぁ疑ったら終わりか

「まぁ住むとこ無いんだろ？だったら俺の家にすまないか？」

「家でも悪いですし」

「いやいや俺たち『友人』じゃないか」

そう言って俺と映姫のドキドキ同棲（？）生活が始まるのであった。

壱話　新たな生活（後書き）

はい！きました！
映姫との同棲生活です！！！！！
待ってました！
映姫かわいいよ映姫！

文章は少ないですが、たぶん毎回この位だと思います。

誤字訂正と感想待ってます！
感想があると作者のやる気がアップします。

弐話　平穏な一日（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

弐話　平穏な一日

映姫と暮らして2年がたった。

え？　時間がたちすぎだって？

それは作者に聞いてくれ。

え？メタ発現はやめれだって？

だ　が　断　る　！

「灰！聞いているのですか！」

「はい。聞いていますとも」

「ならいいんです。ではお説教を続けますよ」

「はい・・・」

そう今俺は、映姫からお説教を食らって居るのだ。

なぜかって？

それはな、俺が映姫の羊羹を食べたからだ。

悪いと思っているんだがかれこれ説教が5時間も続いてるんだぜ。

もうね、俺泣きそうだわ

「だからですね・・・って本当に聴いてるんですか！」

「はいぃぃぃ」

この後１０時間は説教が続いたと言う・・・

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

とある一日

「あー腰いてぇ・・・」

現在木を切っております。

ものすごい疲れます。

「灰。疲れたでしょう。休憩にしませんか？」

「そうだな。」

映姫の作ったおにぎりを食べた。うまかった。

「映姫いつもありがとな」

「いえいえ。友人として当然ですよ。」

「そうだな友人だもんな」

俺たちはこんな生活が気に入っていた。

それからしばらくして、とある事件は起きた――――

弐話　平穏な一日（後書き）

日常編がかけないｏｒｚ
やっぱり文才が無いからかな・・・
まぁ頑張る！

次回はなんと！
シリアスパート＋バトルパートです。
因みに、この映姫との生活はそろそろ終わります。

誤字訂正と感想待ってます！
感想があると作者のやる気がアップします。

参話　戦い（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

参話　戦い

いつものように映姫と昼ごはんを食べていた。

そう食べていたんだ。

そしたらいきなり映姫が何かに引きずりこまれて行った。

其の様をただ呆然と見ることしかできなかった。

「ぁあぁぁぁぁぁぁあああああっぁぁぁぁぁアアアアあああああああ」

泣いた。

数分だろうか、数十分だろうかはたまた数時間だろうかと言うときが過ぎ。

突然映姫の座っていたところに手紙が現れた。

内容は、簡単に言うと映姫は預かった、返してほしくば、東源の丘でまつ。

と書いてあった。

東源の丘とは、ここから山を二つ越えたところにある。

「・・・泣いていても、映姫は帰ってこない。手紙の事を信じれば東源の丘にいるのだろう」

そう言って、腰に刀を刺し家をでた。

□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

一つ目の山を越えるときは妖怪のよの字も見えないほどだったのに、
二つ目の山に入ったとたんに、
数十もの妖怪に襲われたが能力を使い倒した。
いまだ、刀は抜いていない。
東源の丘に近づくほど、妖怪は増えていきそして強さもあがってきた。
だがまだ刀は抜いていない。
「なんだ。人間ここまで来るとはな」
そう言って話しかけてきたのは妖怪だった。
今までの妖怪とは違い知能を持っているようだった。
だがそんなものは関係なく、能力を使って殺そうとした。
が

その能力はいとも簡単に消された。

「残念だったなそんなもの俺には効かねぇよなんせ俺の能力は『能力を無効化する程度の能力』だからな！」

「チッ」

「おいおい。こっちも能力教えたんだ、お前も教えてくれたっていいじゃねえか」

「『炎を操る程度の能力』だ」

「見たまんまだな！だが残念俺には気かねぇよ、俺を倒すんならその脇にある刀でもつかってみるんだな！」

「そうするしかないよな」

そう言って刀を抜き正面に構えた。

「おお、様になってるじゃないの！まぁいい俺は勇戦！種族は鬼だ」

「俺は不知火灰。種族は人間だ」

ほぼ同時に二人は動き出した。

勇戦は豪快に、灰は滑るようにして。

灰の一閃だがそれは届かず勇戦の持ってた、矛で防がれた。

「おお、すごいデタラメな太刀筋だな！刀握った事無いんじゃ無い

のか？」

「かも、な！」

会話をしながらでも彼らは切りあう。

「はあ！」

「ッ」

勇戦の矛が灰をかすった。

かすったと言ってもそれは妖怪の力、脇腹を深々と切られてしまった。

「くそが・・・」

「残念だったな。」

「だがな、諦めるわけにはいかないんだよ！」

俺は、あいつを映姫を助ける！なんたって『友人』なんだからさ！

「はぁあああああああああ」

刀に霊力よりももっと白くそして神力よりも美しい生命力が溜まって行った。

「ぐっ」

その声と同時に吐血した。

「これで終わらせる！」

「はぁあああああああ！」

一閃それは刀の斬激と言うよりも一種のレーザーに近かった。

だが其の一撃を食らってもなお。倒れずに勇戦は立っていた。

「ぐぅうう、効いたな今のはだがまだまだ、だ！」

腹、顔、腕、肩それぞれに一発つづいれた。

これで完全にやっただろうと勇戦は思った。

「俺、は・・・まだ死ねない。あいつを・・・・映姫を助けるまではッ！」

そう言って先ほどの一閃のときよりも多く生命力を刀に吸わせ、力を増幅させた

そして勝ち誇っている勇戦を上から下えと袈裟切りした。

「が、は・・・」

その声とともに勇戦は倒れた。

「はぁはぁはぁはぁ。ぐっ、う・・・」

刀に吸わせた生命力が多すぎたのか勇戦にもらった傷が深すぎたのかは分からないが

灰は満身創痍と言っても過言では無い状況だった。

だがゆっくりと前へと進んでいた。

参話　戦い（後書き）

まず最初に八神　未来さん感想ありがとうございます。

映姫がかなり好きとのこと私も大好きです！！！！

そして映姫はメインヒロインなんでしょうか？

ですが、現時点では映姫がメインヒロインです。

変える気はさらさらありませんが。

今回戦闘描写いれて見ました。

無理です。難しすぎます。

そして一言も話さない映姫

そして相変わらずの文才

なんとゆう最悪の３拍子！

ｏｒｚ

８月２３日誤字訂正

次回も明日には更新すると思います。

あくまでたぶんですが

これからラスボス編です。

って言ってもまだまだ終わりませんが

誤字訂正と感想待ってます！

感想があると作者のやる気がアップします。

肆話　再会と死（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

肆話　再会と死

「・・・・く、深手だな。こんな事で映姫を助け出せるのか？」

こんな体たらくで？

ボロボロなのに？

死にそうなのに？

助けなくてもいいんじゃ無いか？

あいつは地蔵なんだろ？

だったら死ぬわけ無いじゃないか

俺が諦めたらどうなる！

地蔵だからって死なないとは限らない！

だから俺は

「絶対に映姫を助けだす！」

また決意を心に秘め、灰は歩き、森を抜け「東源の丘」の入り口付近についた。

ガチガチ

変な音が聞こえた。

「なん・・・だ？」

そして少し歩くと音の正体が分かった。

大きな骨の体に、髑髏。

「なんだ。こいつは」

「フハハハハハ！！！よく来たな人間！」

「ッ！？」

「なんだ髑髏が怖いのか？」

「てめぇか、てめが映姫を攫ったのか！！」

灰が怒気を込めながら声を発すると同時に灰の体からは炎があふれ出した。

「ほう。中々の炎だな。危うく滅せられそうだな、アハハハハ」

「笑って無いで答えやがれ！」

「ふむ、で。地蔵だろ？ふん。そこらで野垂れ死んでるんじゃないか？」

髑髏自体の表情は変わっていないが、ニヤニヤしているのが空気で伝わってくる。

「てめぇぇぇぇぇぇぇぇぇ」

そのまま構えも無しに灰は髑髏に突っ込んで行ったが、その炎は呆気もなく消された。

性格には黒い瘴気のようなものに侵食されて消えた。

「残念だな。俺の能力は『あらゆるモノを呪う程度の能力』だ」

「くッ」

「ふん。なに、あの地蔵は死んでおらんよ。」

そらと言う声とともに髑髏は映姫を灰の方に投げた。

「なッ！」

驚きつつも受け止めた。

そして映姫を近くの木に寄りかからせておいて髑髏の方を向き気になっていたことを聞いてみた。

「なぜ、映姫を返した？」

「返してほしくなかったのか？」

なわけ無いだろう。

ではなぜ返したのだ？

分からない。

「ハハハハハハ！その地蔵はな、呪われてるんだよ。俺によってな」

「ちなみにな。俺を殺すしか治す方法はないぜ！！！」

「てめぇ・・・絶対に殺す」

行った瞬間体に炎を纏い。右手に刀を左手に能力で作り出した十字型の炎剣を持ち切りかかった。

もちろん、刀の方には生命力を与えて。

「ぐぅ！？」

髑髏の右腕が刀によって切り落とされ、左腕は炎剣によって溶けた。

「すごい、なぁ。ならば俺も本気で行かねばな」

そういった瞬間、莫大な量の妖力が開放された。

その妖力は全てを呪い殺されるような感じがし。

「がッ！？」

先ほど切り落としたほうの右腕で殴り飛ばされた。

灰は肋骨が折れ、内臓はぐちゃぐちゃになった。

「つまらんな。実につまらん。」

「がッ・・・負けるわけにはいかない！！！」

満身創痍所ではなく、もう既に死体同然の体で立ち上がった。

「立てるのか。根性あるな。だがお前には興味ない、邪魔だからさっさと死ね」

髑髏は右腕で殴った。

そして灰は死んだ。

筈だった。あたる瞬間に木の所で寝ていたはずの映姫が灰を突き飛ばし、身代わりになった。

「な・・・え・・・い・・・え・・・き？」

「灰・・・すみません。迷惑かけました・・・ね」

死体同然の灰よりも傷は深く、自分でも死ぬと分かっているだろうに、映姫は笑顔で灰の事を心配していた。

「なん・・・で・・・なんでなんだよ！何で笑っていられるんだよ！！！」

「なんで・・・って、灰。私は・・・あなたの事が・・・好・・・き・・・だか・・・ら」

そう言って薄っすらと開けていた目をゆっくりと閉じた。

「あああァァアあああああああアアアアァぁぁぁあアァぁあぁぁぁぁァアアア」

「ハハッハ！愉快だ。爽快だ実に悲鳴はきれいだな！」

「絶対に殺ス」

右目からは血を流し、全身に黒く全てを燃やす様な炎を纏った姿で立っていた――

肆話　再会と死（後書き）

あわわわわわ。映姫が死んじゃいましたｏｒｚ

これも必要な事なのですよ！

レキさん八神未来さん感想ありがとうございます！！

誤字訂正がありましたので訂正しました。

面白いですとか頑張ってくださいとか続きが気になるとか言ってくれて本当にうれしいです。！！

頑張る気力が沸いてきます。

そう言えば今日総合アクセス数見たらＰＶが３９９６アクセスでユニークが８９１人でした。

ものすごいうれしかったです。

やる気が出てきました！

次回は少し開くかも知れません

８月２４日誤字訂正しました

９月１０日一部修正しました。

誤字訂正と感想待ってます！

感想があると作者のやる気がアップします

伍話　決着（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

伍話　決着

「殺ス殺ス殺ス殺ス殺ス殺ス」

灰はただ殴った。

黒い炎を纏った腕で、

その瞬間、黒い炎は髑髏の身体中に燃え移った。

「ッ！？・・・だが、まだ甘い！」

黒い炎がもっと黒ずんで行った。

黒ずみが触れた所から黒い炎は消えて行った。

消えると言うよりは、呪われたと言った方が正しかった。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアア」

灰は、殴った。

何度も何度も。

だが、炎は呪われ、灰自身も呪われ。

満身創痍と言う状況だった。

だが、灰は動いた、己の限界を到に越えているのに。

「グハァアアアア、バカな、ありえん俺の呪いを越えて炎が届くだと！？」

髑髏は動揺していた、先ほどまでは前までと同じく

防げていたのに、と。

「最初は興味本位だったんだがなッ！お前を殺したいと思っちまったよ！」

髑髏は捨て身で殴った。

灰は、もろにそれを食らい吹っ飛んで行き、木に激突した。

その木は、燃え上がり次々と燃えて行った。

瞬く間に一面は黒い炎で包まれた。

「こいつは、すごいな・・・ッ！？」

髑髏が言った瞬間、周りの炎が灰の右手に集まりだした。

その炎はだんだんと形をなし。

十字架のような黒い炎の剣になった。

「ガアアアアアアアア！！！！」

髑髏も右手に全ての呪いを集めた。

二つの黒い塊はぶつかり合った。

そのとき、周りは黒い塊に飲み込まれ、あるものは燃え

あるものは呪われ消えた。

その塊も次第に消え、そこに立っている者は1人だった。

――――髑髏が燃えながら立っていた。

「なんとか・・・勝ったか」

髑髏は体の傷を癒すために、のろのろと歩きだそうとした。

だがその足を黒い人型のものがつかんだ。

「な！？いきｔ」

そう全てを言い切る前に黒い炎に飲み込まれた。

「俺と一緒に冥土に行ってもらうぜ」

灰自身もその炎に飲み込まれ、

二人の戦いは終わった。

――――――両者の死と言う形で

伍話　決着（後書き）

少し更新遅れました。

さてさて、灰君も死んじゃいましたね。

因みにこれからの展開も考えてありますが、

最悪なことに9月からテストが始まってしまうのです。

ですからテスト終わるまでたぶん更新は無いですね。

すみません。

ではまた次回に

誤字訂正と感想待ってます！

感想があると作者のやる気がアップします

陸話　起点（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

陸話　起点

「疲れましたねぇ。」

大掃除。
年末が近づくとだれしもやるだろう。
この少女の服装は巫女服。
普通の巫女服だ、脇が開いていたり、色が青かったりはしない。
神社でたいていは見かける物だ。
そう、この場所は神社だ。
少女は、一人でこの神社に住んでいる。

「まったく、ここが広すぎるのよねぇ」

そうなのだ。
この神社は物凄く広い。

「この広さだってのに、ここの祭神にはあったことないしねぇ」

はぁと少女はため息を吐いた。
この神社には『炎神』が祀られているのだが、少女がこの神社で暮らし始めて5年。
一度も見たことがないのだ。
普通自分の神社ならばそこを拠点にしているはずなのだが、なぜかいないのである。

「まぁ、こんなところでため息ついててもどうなるわけでもないしねぇ」

まぁ賽銭は沢山くれるし、いいけどねぇといい、台所に向かって歩こうと一歩踏み出したのだ。
だが、運悪くこの神社の祭神の一部があるとされている、銀色の杯を落としてしまったのだ――

――ここはどこだ？
――なぜ、俺は生きている？
――いや、死んだ、あの髑髏と共に
――自らの生命力を犠牲にして
――そんな事より大切な事がある。
私は護れたのか？

――彼女をか、俺は護れなかった、逆に護られた。

そうだな。

――俺は弱い、弱すぎる。

分かっているじゃないか

――当たり前だ

なぜ弱いか分かるか？

――？

なぜ、自分が弱い事に気づいているのに、理由には気づけない

――なぜ、だろうか

仕方ないな、私と俺は同じモノだからな。特別に手がかりだけ上げよう

――私と俺？

そう、私と俺（きみ）だ。

――何で同じモノ？

ああ、それは・・・・済まないもう時間のようだ。

――な！？

俺に一つだけ言うぞ――――

ドサと言う音と共にボロボロの着物に、綺麗な灰色をした髪の男が倒れていた。

少女は感じた。

「炎神様？」

陸話　起点（後書き）

久しぶりです。
無事テストが終わりました。
点数は数学が真っ赤です。
もういやです。

そんな訳で、色々起きましたね。
灰君が起きたという事と新キャラです。
完全なオリジナルですね。

では。また次回

誤字訂正と感想待ってます！
感想があると作者のやる気がアップします

漆話　事実（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

漆話　事実

「…知らない天井だ」

どこだここは？と灰は考えていた。
自分は生前こんな屋敷は見たことがなかった。
精々、小屋程度の物だった。

「あ！起きたんですかぁ」

ガラっと襖が開いて一般的な巫女服を着た少女が入ってきた。

「大丈夫ですかぁ？炎神様ぁ」

炎神様？誰の事だと灰は思った。
だが、この場には巫女服の少女と自分だけである。
そのため考えられるのは二つ。

ひとつ、炎神が灰と言うこと。

ふたつ、この巫女服少女は何にか灰以外の者が見えているということ。

だが二つ目はあり得ない。大丈夫ですかぁ？としっかり灰を見て話したためである。

「ちょっと二、三個聞いてもいいか？」

「はい、どうぞぉ」

そうか。と一息ついてから灰は聞き出した。

「炎神とは俺の事か？」

「あたりまえじゃないですかぁ」

だそうだ。ありえん。
なんで俺が神様なんだ？
まあ、炎を出すという点では一致してはいるが…

「本当にか？」

「えぇ、だって立派に神力があるじゃないですかぁ」

なるほど。
これか俺の身体に流れてる、霊力よりも質が半端ない奴。
と灰は内心納得していた。

「じゃあ次、なんで俺は信仰されてるんだ？」

「なんでってほらぁ、がしゃどくろ倒してここら辺を救ったじゃないですかぁ」

がしゃどくろ？
がしゃどくろ、がしゃどくろ、がしゃどくろ…
髑髏？
あいつか？

「次だ、その戦いから何年たった?それと、その戦いの後に緑の髪をした女の子はいなかったか?」

「２００年くらいでしょうかねぇ、女の子のほうはわかりませんねぇ」

「そうか。ありがとう」

「いぇいぇ」

夕飯の支度してきますね。
と言って、巫女服少女は去って行った。

「名前聞いてなかったな。」

それよりも、と灰は考えだした。
なぜ俺は生き返ったのか?
そして、映姫はどうなったのかと
前者はさっぱりわからん。
後者もさっぱりだ。

「手詰まりだな。」

はぁ。とため息を吐き出した。
少し夜風に当たろうと思い月明かりが漏れている襖をあけて、縁側にでた。

「月…か。綺麗だな」

そういえば、と灰は思った。
起きる前に誰かが言っていた言葉だ。
「確か…『自分というモノを理解しろ』だったな」
自分というモノ？
自分の事はもう理解している気がするんだがな。
「むぅ。そういえば、なぜ俺は生きてるんだ？」
こっちも謎だな。
どういうことなのだろうか…
そう思いつつ思考をしていた。
数分だろうか。
ふと頭に言葉が浮かんできた。

『死んでも灰になって生き返る程度の能力』

…果たしてこれは…程度なのか？
ものすごい気になるな。
「でも、確かに俺は自分自身を全然理解してなかったな。」
ふふ、っと笑って月を見上げているとさっきの巫女服少女がご飯ですよぉと呼んできた。

「さて、行きますかね。２００年ぶりの食事にでも」

食事中に色々聞いてみよう。
ま、最初は名前の教え合いだな。
あと俺の刀も聞かないとな＜――――

漆話　事実（後書き）

最初に八神　未来さん感想ありがとうございます。
これからが本番です（キリ

嬉しいことがありました！！
なんとＰＶが１万そしてユニークが２千！！
嬉しすぎますね！！

１万を記念して次回は番外編やろうと思います。
でも番外編ってどうしましょうか？
一応アイディアだけですが

ＩＦルートですね。

映姫様とのいちゃいちゃ話（これはＩＦじゃなくて、同棲時代の）
でも作者に期待しちゃいけない。（いちゃいちゃ書ける気がしないもの）

灰君が起きたのが、今の幻想郷だったら

灰君が一時的に女（幼女）になってしまったら

この三つくらいですかね。
よかったら選んでください。

１０日までに一番多かったのにします。
まぁ、誰も選ばなかったら、作者の独断と偏見で決めます。

あと、そういえば灰君の設定とか見せてませんでしたね。
今度載せます。

ではまた次回

誤字訂正と感想待ってます！
感想があると作者のやる気がアップします

番外編　期待はしないで。（前書き）

この話は、本編の過去話です。
それと一万ＰＶありがとうございました。

アンケートでこの話はいちゃいちゃ話になりました。
だが一つ言おう。
期待はするな！（かけないですもの。いちゃいちゃ）
だが頑張ってみる

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

番外編　期待はしないで。

ｓｉｄｅ映姫

ガラっと共に灰の部屋に緑の髪をした少女。
映姫は入ってきた。

「まったく、ぐっすり寝ていますね。」

いつもだるいだるいと言っている姿とはちがってかわいらしいですね。

「かわいいですね・・・は！？違います。そうです、灰の寝顔を見に来たんじゃありませんでした！」

そろそろ起こさないとダメですね。

ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ灰

「灰、起きなさい。」

ゆさゆさ。

「いい加減に起きなさい。」
ゆさゆさ。
「うーうー」
「灰！早く起きなさい。」
いやだ。まだ眠いんだ俺は。
そうだ、映姫も一緒に寝れば良いんだ！
「むー」
灰は直ぐに映姫を掴んで布団の中に引きずり込んだ。
「かかかかかかかか、灰！？」
「うー」
「ななななな、何で抱きついてくるんですか！？」
「すべすべだなー。えいえきはー」
「ね、寝ぼけているのですか！？」
灰は映姫を抱き枕のようにして、抱きついている。
「まーいいじゃないかー。いっしょにねよーよー」

それから１０分後

「う、うん？」

なんか下半身に違和感が・・・

「な、なんだと！？」

灰の下半身の中央に顔を埋めている映姫がいたのだ。

「ちょ、ちょ、これはヤバイ俺の理性が消し飛びそうだぞ・・・」

まあ、襲ったりはしないがね！

「おい。映姫なぜ俺のとこで寝てる」

ゆさゆさ

「ん・・・？」

少しゆすっただけで映姫は目覚めた。

寝起き良いんだな。

「でだ、映姫なぜ、俺の布団で寝てた？」

「それは、灰がー」
俺が・・・だと！？
寝ぼけてたのか、俺…
「俺がか、すまなかったな」
頭をやさしく撫でてあげたら目を細めて、気持ちよさそうにしていた。
「は！？そうです。撫でられている場合じゃありません！」
「ん？どうしたんだ？映姫？」
「そうです。今日は出かけると約束したじゃないですか！」
確かに、約束してたな。
なんだっけ、全然覚えてないぞ。
「その顔忘れてましたね！」
「い、いや覚えてたぞ！」
「じゃあ、言って見てくださいよ」
「あーあれだろ。ほら、アレ、あれ」
「はあ。甘味所に行くんです！さぁ行きますよ！」

ずるずると俺は引きずられて言った。

少女青年移動中

「つきましたね。」

「だな」

甘味所の名前は、甘味分かりやすいな。

「で、何が食べたいんだ？好きなもん食べていいぞ。朝のお礼？だ」

「朝・・・ですか・・・」

ポっと顔が赤くなった映姫を横目に俺はとりあえず、羊羹と団子を頼んでいた。

「うまいな。そうだろ映姫」

「ええ、おいしいです。」

ぽけーっと二人で食べていると映姫が次は服屋に行きましょう！と

高らかに宣言したのであった。

青年少女移動中

「映姫。俺はここにいてもいいのか？」

古来から男子は服屋に抵抗がある。
だってまぁそりゃあね。下着とかさ。
恥ずかしいだろうが

「ええ、いていいのですよ。灰に選んでもらいたいんですから」

「うれしい限りですよ。はぁ」

「灰、この服似合いますか？」

試着室のようなところから映姫は出てきた。

「な・・・！」

「気に入ったみたいですね」

映姫が来ている服装は、西洋のお姫様が着るような服だった。

「ああ、かわいいな。」

「な！？ちょっと恥ずかしいんですが！！」

そうして、映姫との買い物は終わらせて家に帰って着ていた。

「なあ、映姫？」

「ん？何ですか？」

ものすごい、密着しております。
まあ、買いもの中も腕組んでたけどさ。
今、なんてもう抱き合ってる感じだぜ。
まぁうれしいんだけどさ。

「はぁ。まぁいいか」

「そうですよ。いいんです」

語尾に音符がつきそうな感じだった。

「映姫。風呂どうする？一緒に入るか？」

「なっ！？」

映姫は顔を真っ赤にしてうろたえていた。
まったく、からかいがいがあるな。

「冗談だよ」

「・・・り・・・す」

「え？」

「一緒に入ります！！」

「・・・は！？」

「だから一緒に入りましょう！」

「いや、いや冗談だって！！」

俺の顔が真っ赤になっている自身があるぞ。

「男に二言はダメですよ。さぁ行きましょう！」

少女青年を引きずりながら移動中

「ヤバイ、有り得ない位ドキドキする。」

俺は湯船につかりながら、悶々としたいた。

「し、失礼します」

がらっと開いた扉の所には布を巻いた顔を真っ赤にした映姫がいた。

「体・・・洗いっこしませんか。灰？」

そ、そんな上目使いで見ないでくれ。

悶えそうだ。

「あ、ああ。一緒に洗おうか」

「じゃ、じゃあ、まず私が灰の背中洗いますね」

「あ、ああ」

この後二人で洗いっこをして、湯船に二人で浸かった。

「今日の俺たち、なんか新婚みたいだったな」

「え！？た、確かにそうでしたね」

「俺たちって『友人』だよな。」

「ええもちろんです。」

まあ、こんな友人の形もありだよな

番外編　期待はしないで。（後書き）

描くのが大変過ぎました。
リアル３時間かかりました（半分は動画見てましたが）
それと支離滅裂になっていますし、いちゃいちゃしてません。
あの二人はあくまで『友人』と言うことですから・・・
正直難しかったです。

たぬくさん、七夜士郎さん、ｅｊｇｔさん感想及びアンケート回答ありがとうございます。

ｅｊｇｔさんアールグレイさんの出した添い寝ＣＤ私も買いました。
本当にあれはよかったです。ニヤニヤが止まりませんでした。

七夜士郎さんラブラブ展開にしたかった。
でもダメでした。
でも次頑張る！

たぬくさん指摘ありがとうございます。
一緒に鳥つながりと言う事で頑張りましょう！！

次回、主人公設定

誤字訂正と感想待ってます！
感想があると作者のやる気がアップします

オリジナル登場人物設定（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

オリジナル登場人物設定

不知火　灰　しらぬい　かい

種族　半人半神
身長　１８０センチ
体重　５４キロ
血液型　Ｂ形
誕生日　８月６日
一人称　俺
武器　刀（自作）　名　不知火
能力　刀（神社に在った）　炎神
『ありとあらゆるものを燃やす程度の能力』
『死んでも灰になって生き返る程度の能力』

身体的特徴

髪　灰色
眼　灰色
服装　灰色の浴衣っぽいものを着流し

炎神になってからは、好戦的になった。
がやはり基本的に温厚。

実は視力が悪く、いつも眼を細くしている。
過去能力で視力が悪いと言う事実を燃やそうとしたが、なぜかできなかった。
創造神（作者）の力だろうか？
戦闘では近接、遠距離共に可能
武器はあまり使わず、無手が多い。
通常時ではあまり炎は使えない。
一度死んだときに炎の大半を不知火に強制的に移されたため。

相馬　忽滑　そうま　そうこつ

種族　髑髏
身長　１５０センチ
体重　ここは破れていて読めない
血液型　妖怪に血液型はあるのだろうか・・・
誕生日　１０月２３日
一人称　私
武器　骨
能力　骨を操る程度の能力
不明

身体的特徴

髪　白と黒が混ざっている
眼　黒
服装　ゴスロリっぽい物

最初は敵討ちに来たものの、灰に精神的にすくわれた。
そして、灰の事が好きになった。
接近戦は少し苦手であるが、遠距離中距離となると、凄く強くなる。
一人一種族である。

オリジナル登場人物設定（後書き）

幻想郷縁起書こうと思った。
でも、描き方が分からなかった。
だから自分が書いてた設定をコピペした。
反省はしていないだが後悔はしている。

ｅｊｇｔさん感想ありがとうございました。
そうなんです。周りから見たら絶対に『友人』じゃない。
ですがあの二人は『友人』にこだわってるんです！
まぁだからと言って何もないんですがね。

添い寝ＣＤは寝れませんね。
私は映姫様しか持ってませんね。

ではまた次回。

誤字訂正と感想待ってます！
感想があると作者のやる気がアップします

捌話　初宴会（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

捌話　初宴会

「な、なんだこれは？」

「ご飯にきまってるじゃないですかぁ」

分かっている。分かっているさ。

これが、ご飯だと言うこと位。

「い、いや。こんなに豪華なのは、初めて見たからな・・・」

「奮発したんですよぉ。炎神様のためにぃ」

奮発か・・・いや、奮発って域じゃないよね！？

料理の数は数百に質もものすごくいい。

「ありえない」

「何がですかぁ」

「て言うか、この量一人で作ったのか？」

「いやいやぁ。私だけじゃありませんてぇ、村の人たちもいますよお」

と、巫女服少女が行ったと同時に食事が並べて会ったところに村長っぽい人が入ってきた。

「ああ、炎神様！！」

「あ、あぁ」

「炎神様どうか、この食べ物をお納めください。そして我が村を護ってください」

護るのは別に良いんだが、この量は食べきれない。

どうしたものか・・・

――そうだ！

「村の人たちも呼んでくれ」

「な、なぜでしょう。まさかこれでは足りないと？」

「いや、違う！宴会を開こう」

「いや、炎神様にしつ「炎神の俺が言いと言ってるんだ」・・・はい、分かりました」

――村人、炎神、巫女宴会中・・・

「で、巫女さんよ。」

「な、なんですかぁ」

巫女服少女も酔っているらしく、顔を赤くしてふらふらしている。
だが、灰は能力でアルコールを燃やしているため、ほとんど素面と変わらない。

「名前はなんと言うんだ？」

「私ですかぁ？」

「お前以外に誰がいるんだ」

「私の名前はぁ、真（まこと）ですぅ」

「苗字は？」

「ないですぅ」

と言った後直ぐに真は、眠ってしまった。
自分以外の村人たちも寝てしまったらしく、神社に布団を敷いて、寝ている人たちを寝かせた後、そとに出ていた。

「真・・・ねえ。」

俺が神様になっている事が一番の驚きなんだよな。
まあ、受け入れた方がいいかな。

はあとため息を吐いた直後、灰は吹き飛ばされていた。

「誰だお前は」

捌話　初宴会（後書き）

いつもながら短いですが、更新しました。
いつものようにほぼ全部をカットしてますね。
と言うか、早く原作キャラいっぱい出したい。
これが本音です。
まだまだ先ですがね。
ｗｉｋｉとか見つつ屋って行きたいと思います。

ではまた次回

誤字訂正と感想待ってます！
感想があると作者のやる気がアップします

玖話　復讐者（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

玖話　復讐者

「誰だお前は」

灰の言った言葉が暗闇に響いた。

「誰だ、ね。強いて言うなら復讐者ってとこかな」

そう言いながら、木の陰から一人の少女が出てきた。
髪は黒、目も黒そして服も黒。
だが頭にかぶった髑髏の仮面だけは白色で一際目だっていた。

「復讐者？」

「そうだよ。私はあんたを殺したいんだ。全力で、刺し違えても、な！」

少女は言葉を最後まで言い切らないで灰に向かって蹴りを放った。
その蹴りは、小さい体に似合わずものすごい力だった。
だが灰もまともに受けるはずもなく、蹴りが当たる瞬間に打点をずらして回避していた。

「なぜ、俺だ。俺はここ２００年眠っていたんだぞ」

「あはははは、眠ってたのか！じゃあ見つからないよね！！」

少女と灰は激しい接近戦をしていた。
其れとほぼ同時に会話もしていた。

「わかんないの？私が誰か！」
言葉を言い終わると同時に鋭い蹴りが灰の腹にめり込んだ。
「ツ・・・分からないんだが」
まずいな。と毒づきながらも灰からは攻撃をせず、ただ防御に徹していた。
いくら人間ではない、彼女とは言え女の子に手はあまり上げたくないのだ。
「どうしたの！全然攻撃してこないじゃない！！なに！？なめてるの！！」
少女はまた一段と怒りが増してしまったらしい。
そして、感情の高ぶりと共に攻撃の威力、速度があがっているのだ。
「く・・・で、誰なんだ。お前は！」
いくら防御に徹しても防ぎきれない。
と言うより、今まで防げていたのが驚きだった。
２００年前だったなら、この位造作もなかったはずなのだが
やはり２００年のブランクは長かったらしい。
「誰ねえ！教えてあげようじゃないの！！」
やはり彼女は言葉とほぼ同時に攻撃を放ってきた。
目では見切れていたが体がそれに反応できず、
そのまま灰は、吹き飛ばされた。

「私の名前は、相馬忽滑(そうまそうこつ)あんたが２００年前に殺した、髑髏の娘だ！！」

空中に先の尖った槍を生み出すと吹き飛ばされていた灰目掛けて、一斉に飛ばした。

「がッ！？」

体勢を崩した状態でいた灰にあまたの骨が刺さった。

「ガハッ・・・」

ドサっと言う音共に灰は崩れるように倒れた。

――――――絶命した

「アハハハハハ！！死ンダ、死ンだ！仇とったよ父さん！！」

アハハハハハハハハハハハと言う狂った笑い声は響いていた。

この状態を見たものは誰もがそう思うだろう。
確かに灰は死んだ。
だが灰の能力を思い出してほしい。
『ありとあらゆるものを燃やす程度の能力』
これと
『死んだら灰になって生き返る程度の能力』
この二つがある。
ゆえにまだ灰は死んでいないのだ。

「？」

ひとしきり相馬忽滑が笑い終わるとそこには灰の死体ではなく灰(はい)があったのだ。

「どう言う事！？」

「なんで死体じゃなくて灰になってるの！？」

相馬忽滑が叫んだまさにその瞬間。
地面にあった灰(はい)は集まり、人の形になって行った。

「お前が俺を恨むのも分かる。だがな、俺だってあいつを許せなかった」

「な、なんで・・・なんで生きてるのよオオオオオオ」
相馬忽滑はそう言いながら、灰の腹に自身の力で作り出した骨を深々と刺した。
「ぐ・・・俺だって、大事な人を殺されたんだッ！！」
「お前だけが、不幸だと思うなッ！」
「ッ！？」
相馬忽滑はビクッと体を揺らした。
「俺を殺したいと言うことは分かった。だが俺は能力で死ねない」
「だが、たとえ死ねても死んでやることはできない」
「あいつに・・・映姫に救われたこの命無駄にはできない！！」
「だからさ、俺を殺したいのは分かるだがな」
「俺は絶対に死なない。」
「だがまだ俺を殺したいと言うなら俺と一緒に来い！一緒に来て空き在らば殺そうとしろ！」
そう言って灰は相馬忽滑を抱きしめた。
乱暴にではなく、父親のように優しく、包みこむように。

――――――相馬忽滑は嬉しそうな顔をしながら眠りに落ちた。

玖話　復讐者（後書き）

ものすごく強引になりました。
ですが、私の文才ではこれが限界です（，・ω・、）

あと、もう少しで２万ＰＶ本当にありがとうございます！！

七夜士郎さん感想ありがとうございます。
少し分かりずらかったですね。
炎神は主人公の灰君です。
でも炎神が灰君じゃなくて、敵みたいな感じの話を感想見た後に思いつきました。

たぬくさん感想ありがとうございます。
映姫ですが・・・言えませんね。
ネタバレですしｗ

ではまた次回

誤字訂正と感想待ってます！
感想があると作者のやる気がアップします

拾話　日常（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

拾話　日常

あの戦いから数日経った今日。
灰は悩んでいた。

「バカな・・・何故だ。何故なんだァアアアアアアアアア」

自分は恨まれる役なのに、何故忽滑に好かれているのかと。

「い、いや。アレだ。恋人的なものじゃなくて、友達的な奴だ。うん」

灰自身は結構鈍感なのだが、何故忽滑の気持ちが分かると言うと其れは、
簡単な事だ。

忽滑が目を覚まして直ぐに、灰にキスをして一言言い放った。

「私。不知火灰の事が好きになりました」

そう言われて気づかない人はいない。

「はあ・・・」

ため息をついていると背中に誰かが抱きついてきた。

「ため息はいてると幸せがにげるよ」

何故こんなにもデレているのだ・・・

と内心灰は思っていた。

だが一つ聴かなければならないことがあった。

「お前は・・・俺の事が憎くないのか？」

ニコニコしていた忽滑の表情は真面目な表情になり言った。

「憎いにきまってるじゃない。でもね、あんただって辛い思いもして来たんだし」

そこで忽滑は言葉を区切って。

また、ニヘラっと笑いながら

それに私はあんたに惚れちゃったからね。

と言った。

「そうか・・・」

「ねえ。私もあんたの事灰って呼ぶから私の事も忽滑って呼んでね。灰」

「・・・」

「何で反応してくれないの!?」

「ん?ああ、すまんちょっと考え事を・・・」

刀はどこに行ったのだろうか?

「ちょっと真に聴いてくる。」

「真?」

「ああ、ここの巫女だ」

そう告げると灰は足早に真を探しに行った。

しばらく探すと本殿の所で掃除をしている真がいた。

「真」

「なんですかぁ」
いつものように間の抜けた様な声だ。
「神社に妖怪が住んでもいいよな？」
「別に私はぁ、楽しければそれでいいですよぉ」
「そ、そうか」
「はぃ」
「後、俺の刀知らないか？」
「刀ですかぁ」
ちょっとまっててくださいねぇと言うと真はふらふらと歩いて行った。
彼女の能力は『探しものを無意識で見つける程度の能力』らしい。
少し前に本人が言っていた。

真が行ってから大分経った。
もう日が傾いてきて、灰がいる本殿に淡いオレンジ色の光が差してきた。

「ん？・・・ああ、遅かったから寝てしまったのか」

誰にも見られてないよな。
と周りを一応探してみるが気配はまったく無し。

「炎神様ぁ、在りましたよぉ」

真が見つけたらしい。
ここにあってよかった、なかったら世界回るはめになるとこだった。

「手伝ってくださいぃ、物が多すぎて埋まっちゃいましたぁ」

真はドジっこ属性でもあるのか？
と変な電波を拾いながら灰は、歩いて行った。

拾話　日常（後書き）

日常パートです。
まったくうまく書けた自信がありませんｏｒｚ

ＰＶ二万ありがとうです！
ものすごいうれしかったです。
これからも頑張って書いて行きますのでどうか
読んで下さってる皆様、ありがとうございました。

ｅｊｇｔさん感想ありがとうございます。
メインヒロインは映姫で間違いありません。
そこは絶対に譲りません（キリ
確かに確実に説教ですね（笑）

と言う訳でまた、次回！

誤字訂正と感想待ってます！
感想があると作者のやる気がアップします

拾壱話　日常　2（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

拾壱話　日常　2

「ひまですねぇ」

「暇だ」

「暇だね」

上から順に真、灰、忽滑である。
炎神を祀っているこの黒柱神社（こくちゅうじんじゃ）には参拝客が珍しく来ていなかったのだ。
いつもは現界した灰こと炎神様を見に来るため、一日三人は参拝客が来ているのだが、
もう昼だと言うのに、一人も来ていないのだ。

「暇だ、参拝客こないかな。」

「なんですかぁ、いつもはめんどくさいって言ってるのにぃ」

「暇だからな。仕方ないさ」

「あ！」

忽滑は何かを閃いたらしく、台所に向かって行った。

「どこ・・・行ったんだろうな。」

なぜか歩いて行った、忽滑の背中に嫌な予感を感じた灰であった。

「さてなにするか・・・」

「そうですねぇ・・・お茶でも飲んでますかぁ」

「其れしかないよなぁ」

それから、しばらくして参拝客と思わしき声が聞こえてきた。

「すみませ～ん」

はぃはぃと言って、真が神社の表に向かっていくのと同時に、本日二番目の嫌な予感を感じた灰で在った。

「いや、今度のは悪寒だな。」

そう自己完結していると、表に行っていた、真が帰ってきた。この世の物とは思えないものを見たような顔をして。

「な、何があったんだ・・・真？」

「い、いえ・・・其れよりも炎神様を呼んでいましたよ・・・」

いつもの口調が消え去り、本気で驚いているような表情をして、真は母屋の方へと歩いていった。

「・・・ものすごい怖いんだが・・・行くしかないよな・・・」

恐る恐るといった足取りで灰は表へと向かって行った。

「どうも～」

そこにいた。

魑魅魍魎が。

今まで見たどんな妖怪よりも恐れを抱いてしまった。

「あ、あなたが俺に用があるんですか？」

思わず敬語になってしまった。

なんていったってそいつの姿は筋肉隆々で顎には髭。

そして服装は、ピンク色の海パンと上にはブラジャーっぽい物を着ていたのだから。

「そうよ～。やっぱり噂で聴くよりもい・い・お・と・こね」

灰はものすごい貞操の危機と悪寒が身体中を駆け巡った。

「・・・」

「やっぱり。いいわね～。」

そう言うとそのそいつは、む～と言いながら口付けをしようとしてきた。

唇が触れるか、触れないかと言う寸前で灰はギリギリの所で躱した。

「あぁん。もったいなぁい」

「こ、こえぇ・・・」

それからそんなやり取りを十分くらいしてから何故ここに来たのかと。

「お前は神だろう、何故この神社に来た」

「ほう。分かっておったか」

先ほどまでの状態とは打って変わって神様らしい感じになっていた。

「ここに来た理由はだ、今からこの大和とミシャグジ率いる土地神と戦争を行う。」

「・・・」

「そこに参加しては、くれんかの。炎神よ」

本気で頭を下げていることが灰には伝わった。

「分かった。参加しよう。この炎神、不知火灰がな」

「ありがとう。本当に助かる。私の名はスサノオ大和の代表的な立場の４柱の内の一人だ」

「スサノオか。よろしくな」

ガシっと二人で握手をし、スサノオはこの事を報告しに行くと言って、飛んで言った。

「なんで、俺が呼ばれたんだろうな」

そう、灰の神力はあまりないのだ。
信仰はされてはいるんだが、いかせん人を救ったこともなければ信仰集めもしない。
そうであったらこうなるのは必然だろう。

「日が暮れてきた・・・」

昼間の暇が嘘のようだなと思いつつ母屋に戻っていった。

拾壱話　日常　２（後書き）

と言う訳で、日常　２でした。
スサノオさんは恋姫無双の卑弥呼見たいな感じです。
そして、一応伏線と呼べない伏線を貼りました。
と言うより、次回はその話です。

ｅｊｇｔさん感想ありがとうございました。
灰が連れてきたと言うことでいいことになりました。
其れとどこかの紅白の巫女とは違いものすごくやさしいので許されました。

因みにですが、忽滑の体型はロリです。
髪の色は、白に所々黒が混ざっている感じです。
真は黒髪のロングでお姉さん系です。

では、また次回

誤字訂正と感想待ってます！
感想があると作者のやる気がアップします

拾弐話　日常　3（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

拾弐話　日常　3

母屋に着くと夕飯ができていた。
が。
なぜか座っているのは忽滑のみで、真はボロボロになって倒れていた。

「そ、忽滑、何故真はボロ雑巾のように倒れているんだ・・・？」

「倒れてませんよ。寝てるんです。」

物凄く良い笑顔で忽滑は言ってきた。
笑顔なのだが、灰は背筋に悪寒を感じていた。

「い、いや・・・アレは倒れ「寝てます」・・・寝てますね。」

灰は久々に恐怖を感じてしまった。
前戦った時よりも殺気が何十倍もあったのだ。

「其れよりも、灰食べましょうよ。」

「そ、そうだな」

「今日は私が作ったんですよ？夕飯」

真は忽滑の夕飯の実験台になったのか？
と灰は内心思いつつ、料理に箸を伸ばした。

「・・・うまいな」

「そうですか！嬉過ぎます！！」

料理はうまい。
じゃあ何故真はああなっているのだろうか・・・

「忽滑って料理上手かっ・・・た・・・ん・・・だな？」

灰はいきなり体中が熱く感じきた。

「ふふ、効いてきましたね？」

「な、なにを入・・・れ・・・た？」

身体中が火照っているのだ。
まるで発情期のように

「惚れ薬と媚薬です！」

また物凄く良い笑顔で返された。
そして、灰は気づいたのであった。
忽滑から感じた悪い予感はこれだと。

「うふふふふ。さあ、灰その火照り私を使って鎮めようとは思いませんかぁ？」

「思わない・・・ね」

耐えるのに精一杯な灰は、忽滑の甘い声に理性の壁が決壊しそうになっていた。

「もぉ～好きにしていいんですよぉ？」

「朝か。俺はいったい昨日何してたんだ？」

「忽滑になんかの薬盛られた気がするんだが・・・」

そう言いながら体を起こそうと思って右手を自分の横に置くとふにっと言う柔らかい感触がした。
バッと言う効果音が鳴るように自分の右側を見ると、そこには忽滑が居た。・・・裸の状態で。
よく自分を見ると自分も裸であり、身体中がベトベトするため、昨日なにがあったか明白であった。

「やっちまったのか・・・俺・・・」

絶望感に浸っていると左隣からも声が聞こえたので向いてみるとそこには・・・

全裸の真が幸せそうに寝ていた。

もちろん全裸で

「二人・・・同時・・・だと!?」

「鬱だ、死のう・・・」

忽滑が使った媚薬の入った箱に永と言う字があったのはまた別のお話である。

拾弐話　日常　3（後書き）

やっちゃいました。
ちなみにですが映姫とはやっていない灰君です。
そして最後の永と言う字分かりますよね。皆さん。
と言う事で日常話はここらで終了。
次回からは諏訪大戦です。
やっと、原作キャラが書けるっ！
うれしいぜ！

それと、灰君のスペカ考えてはいるんですけど、思いつかないんですよね。何かいい技ないでしょうかね。
なんとか符とかもうどう付ければいいのか・・・

ｅ.ｊｇｔさん感想ありがとうございます！
灰君は映姫の説教確定ですね（笑）
因みに映姫はロリです。

ロリキャラばっかだな灰君よ。
ロリコンなのか。
作者はロリでもお姉さんでもいけます。
紫とかもいいですし、フランもいいですね。

ではまた、次回

誤字訂正と感想待ってます！
感想があると作者のやる気がアップします

拾参話　遭難と出会い（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

拾参話　遭難と出会い

「ここは・・・どこだ？」

灰は絶賛迷子中であった。

あの黒歴史　（灰にとっては）の日から少しして忽滑は修行すると言って旅に行き、灰はスサノオからの文で来てくれと言われ、大和神達が集まっていると言う場所を目指して歩いていたのだが、気がついたらよく分からないところに出たのであった。

「これ、詰んでね？」

一面木で埋め尽くされた森、とりあえず真っ直ぐ向かえばつくだろうと思い灰は歩みを続ける。

「修行っていってもなー、何にも考えてなかったし・・・はぁ」
だったらもうちょっと灰といればよかったなと忽滑は思いながら、
団子屋で団子を食べていた。
「んー。どこ行こう・・・」
はぁと本日何度目か、分からないため息を吐きながら、周りをボー
っとみていると。
――隣の村で妖怪に人が食われたってよ
――へー。だけどおらたちのとこは大丈夫だな。諏訪子様が見守っ
てくれているもの
――諏訪子様万歳ってか？
――おうともよ
「諏訪子様ねぇ・・・」

忽滑は思っていた、諏訪子と言うのは神様だろうと、だったら修行できるんじゃねと。
考えたあとの行動は早かった。
すぐさま、勘定をし、人づてに諏訪子と言う神がいる神社を聞き、既に鳥居の前にまでついたのであった。

「ここが諏訪子様のいる神社ねえ」

とりあえず、適当にお賽銭入れて祈っておけばいいかと思い。
お賽銭箱に向かってお金を投げ入れた。

「うーん。・・・灰が元気でいまいす・・・いや灰も神様だから違うか、じゃあ真が健康でいますように」

パンパンと手を叩き参拝を終えた

「妖怪が何のようだ」

そこには金髪で頭には目のついた帽子をかぶっている少女がいた。
だが忽滑自身はそこまで驚いていなかった、神社の鳥居をくぐったあたりから何かにみられていると言う感覚があったためだ。
だが、このような小さな子とは思っていなかった。

「どうしたのかな？迷子？ああ・・・でも神社だから神社の子かな？」

「誰が子供だ！！そう言うお前だって子供体型じゃないか！」

「だけど、背と胸は勝ってるけどね」

「うぐぐ・・・」

「で、本当に何のようだ神様？」

先ほどまでのふざけた雰囲気とは打って変わり、真剣な表情になった。

「変わりすぎだろう・・・妖怪」

そう言うと忽滑の周りには白い蛇が集まって着ていた。

「殺されたくなかったら、ここから出て行くんだね」

「甘いね」

忽滑はそう呟くと空高く飛びあがり、回転しつつ降りてくると神様の前で土下座をした。

これが俗に言うジャンピング土下座の進化形態である。

「・・・へ？」

「私をあなた様の弟子にしてください！」

「え？・・・えぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」

神様は心底驚いたようで叫び声まで上げていたが忽滑はそんなもの無視をして自己紹介をしはじめた。

「私の名は相馬忽滑、がしゃどくろの妖怪です。私はまだまだ弱く、

自分の目標も達成できていません。ですからあなた様にお教を乞おうと思い、この地に参ったしだいです」

「そ、そこまで言われたんじゃ、仕方ないこの洩矢諏訪子が師になってやろう」

「ありがとうございます」

忽滑は内心ちょろいなこの神様と思いつつ、必ず強くなると心に決めたのであった。

その頃不知火灰はと言うとまだ遭難していた。

拾参話　遭難と出会い（後書き）

と言う訳で諏訪子登場しましたが、諏訪子の口調がいまいち分かりません。
神奈子も分からないですねぇ・・・調べよう。
そう心に決めました。

ｅｊｇｔさんたぬくさん感想ありがとうございました。

永の字が刻んである箱は後々触れると思います。

忘れてなければ。

相変わらずの駄文失礼しました。

九月二十二日誤字修正しました。

ではまた、次回

誤字訂正と感想待ってます！
感想があると作者のやる気がアップします

拾肆話　大和の神（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

拾肆話　大和の神

「どこなんだ・・・ここは・・・」

灰はまだ、ふらふらとスサノオたちが待っている場所を森の中で探していた。

「ここは、どこなんだぁあああああああああ」

叫びながら走り出した。

「あああああああああああ・・・ん！？」

走り出していた灰は崖に飛び出していた。

「な、なんてベタなぁあああああああ」

と叫びながら灰は落ちていった。

「神奈子！？何か落ちてきたよ！？」

「は？」

神奈子と呼ばれた少女（？）の上に灰色の髪をした神様が落ちてきた。

「ぐぇ！？」

「物凄いいてぇ・・・アレ？そうでもねぇ」

灰は恐ろしく高い位置から落ちてきたにも関わらずほとんど無傷であった。

何故だろうお灰が悩んでいた。

「それに、落ちる瞬間何か聞こえたような？」

「あ、あの～」

「ん？」

灰が横を向くと、そこには灰よりも白い髪をした少女が立っていた。

「あの、貴方の下に神奈子がいるんですけど・・・」

「・・・え」

恐る恐る灰は下を見てみると、そこには背中に巨大な注連縄を下少女（？）がいた。

「・・・」

無言で灰は立ち上がり、そのままどこかへ向かおうとした。

が

右腕を誰かに掴まれた。

右腕の方を灰は見てみると筋肉隆々そして顎には髭、服装はピンクのカイパンをして、上にはブラジャーのようなものを着た男、スサノオであった。

「な、なぜお前が・・・」

「何故ってそりゃあここが大和の本陣だ・か・ら」

語尾にハートがつく様な感じでスサノオは語りかけてきた。

そしてそのまま顔を近づけてキスをしようとしてきたため、灰の中にある何かがプツンと切れてしまった。

「炎符「黒炎柱」」

爆音が響きスサノオを中心に数メートルが黒い炎の火柱に包まれた。

「黒炎「内から食らう黒き炎」」

火柱の中にいたスサノオの体の中から黒い炎が物凄い勢いでてきた。

「悪は滅びた・・・」

火柱が消え、真っ黒になったスサノオが落ちてきた。

「よくやった、黒き炎の神よ！」

先ほど灰の下にいた神奈子と呼ばれた神が本当にうれしそうに言ってきた。

「ん？・・・気にするなよ。」

「いやー、助かったよ。スサノオは見てるだけで気持ち悪いからね」

「アレは気持ちわる。本当に気持ち悪い」

「ああ、アレは気持ちわる過ぎる。死んだ方がいいよ。ホントに」

二人はスサノオの悪口で意気投合したらしく、話を弾ませていた。

「良い天気だね」

少し離れたところで、軽く涙目になってずっと空を見ている、空気な神がいた・・・

「いやー、お前さんとは気があうね」

「いや、本当に気が合うな」

「そういや、名前教えてなかったね。」

「そう言えばそうだな。」

「私は八坂神奈子。大和の神の大将だよ。」

「俺は不知火灰。見ての通りそこらへんにいる半神半人だ。」

「いや、そこらへんにはいないだろうよ。」

ちがいない。と灰が言い。

それから少し談笑した。

「よし、今日は灰が来た日だから宴会だ！」

「神奈子よ、そんなんでいいのか？」

「大丈夫だ。問題ない」

それから数日間は宴会をし続けていた。

「あれが・・・大昔にがしゃどくろを倒したと言う炎神ね・・・」

空中に開いた空間から半身をだして胡散臭そうに笑っている、妖怪が灰の事を見ていたのはまだ誰も知らない。

拾肆話　大和の神（後書き）

最後に出てきたのは完全にあの人ですねｗ
そして灰君はスサノオをフルボッコにしました。
と、これぐらいですかねｗ

と言うか、最近アイディアは浮かぶのですが、物語が浮かびません。
これが俗に言うスランプなのでしょうか？
まぁ、スランプなんて心の持ちようでしょうけど。

ｅｊｇｔさん感想ありがとうございます。
ロリが私が好きと言う理由だけではなくてですね。
ほら、東方ってロリとか少女とか多くないですか？
まぁ、あれです、これから出てきますよ、きっと。

ではまた、次回

誤字訂正と感想待ってます！
感想があると作者のやる気がアップします

拾伍話　大和の神　2（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

拾伍話　大和の神　2

「灰。」

「なんだ？」

灰がボーと空を見ていると、神奈子が話かけてきた。

「いやーいきなり、宴会にして悪かったね」

「いや、俺も楽しかったからさ。」

「そうかい。だったらよかった」

少しホッとした神奈子を見ながら灰は少し苦笑しつつ、大和の主要の神って誰かとといかけて見た。

「あー、紹介する前に宴会だったもんね」

悪い悪いと言いながら神奈子は紹介するから半刻過ぎたら宴会をやった会場に来てくれと言い去っていった。

「半刻か、刀の手入れでもしてるか。」

そう言うと『不知火』ではなく、神社の宝物庫に在った『炎神』を抜き、丁寧に整備を始めた。

「・・・し・・・ろ・・・い」

「・・・」

「は・・・し・・・い」

「・・・」

「反応しろやあああああ」

ドゴンと言う音が鳴る位の勢いで灰の頭に横なぎに振ったオンバシ

ラが直撃した。

「がッ！？」

「反応しないからやったまでだ、後悔はしてないない」

反応しなかった俺もダメだが、反応しないから殴る神奈子もダメだと思うと一人心の中で呟くのであった。
叩かれた頭を抑えながら昨日宴会をやったところに行くと、スサノオと宴会前空気だった白い髪の少女と見た事がない女性だった。

「じゃあ紹介するね、私は知ってるだろうけど、八坂神奈子だ。この大和の大将をやってる」

神奈子はそう言うと一番右に座っているスサノオに紹介しろと言う意味を込めた目配せをした。

「まぁ私のこともしてるわよね～ん。ス・サ・ノ・オよ」

腰をクネクネさせながら紹介したため、灰を含めた神たちは若干顔を引きつらせた。
とりあえず、と神奈子は言いスサノオを天高くオンバシラで吹き飛ばした。

「えっと、わ、私は天照と言います。よ、よろしくです」

とスサノオの隣に座っていた白い髪をした少女が恥ずかしそうに言ってきたため。
灰は爽やかによろしく。と返したらまた天照は真っ赤になってしまった。

「私は、八咫烏だ。」

次に見た事のない女性が簡素に自己紹介をした。

「俺は、炎神不知火灰だ。よろしく頼む」

と、灰も自己紹介をした。
それから、実力を見たいと言われ、スサノオと戦うこととなったが
今日の段階では
スサノオがまだ空中から帰ってきてないため、明日以降と言うことになった。

「さて、忽滑。」

「何ですか？諏訪子」

「今日は私と模擬戦をするよ。」

分かりましたよ、と忽滑は言い庭に出て言った。
灰と分かれて諏訪子のところで修行していた忽滑は、たった数日の訓練で諏訪子と対等に戦えるまでになっていた。
其れは発現した能力のお陰でもあるんだが、一番は自身がもともともっている髑髏と言う種族の力を完全に使いこなすことができたこ

とだろう。

「いくよ、忽滑」

諏訪子はミシャグシの祟りを操り、忽滑を祟ろうとするが、忽滑はその祟りをギリギリのあたりでかわして行く。

「天井骨」

忽滑が呟くと諏訪子の上空にまるで天井ができたかの用に骨の槍が浮かんだ。
その槍は全て中心にいる諏訪子に向けられ、一斉に落ちてきた。

あたったと忽滑は確信したが、諏訪子は自分の真上の骨を祟り空中に躍り出た。

「そんなもんじゃ、私には当たらないよ！」

と諏訪子は高らかに笑っていたが、地面に目を向けると、刺さっていたはずの骨がなくなっていた。

「なッ！？」

地面に刺さっていた骨は何時の間にか諏訪子の上空にあり、また一斉に落ちてきた。
骨はまだ幾千とあり、地面に刺さっては上空にと言うのを骨がなくなるまで続いた。
その、幾多の攻撃をさすがに全部かわし切れなかったらしく、所々に怪我を負っていた。

「無限骨牢」

宣言した時、諏訪子の周りを骨が重なり在ったようになり、行く手を阻んだ。
ただそれだけで終わるわけもなく、骨は内部で無限に増え続け、諏訪子を圧迫して言った。
今度こそ勝ったそう確信した忽滑は油断していた。

「うーん。術自体はよかったんだけど、最後の油断がねー」

忽滑の首に鉄の輪を添えた状態で、諏訪子が言ってきた。

「また・・・負けですか・・・」

「うん。でも、そこらへんの神になら勝てるんじゃないのかな?」

「そうですか・・・貴女に勝って見たいものですよ」

直ぐ勝っちゃいそうだよ忽滑ならと諏訪子は笑い、忽滑は次こそはと決意を新たにしたのであった。

拾伍話　大和の神　２（後書き）

数日振りの更新です。
気がついたら、忽滑が強くなってました。
特に強くする予定はなかったんですが・・・

因みにですが、天照は内気な感じで胸は大きいです。そして背は低いです。
八咫烏は、性格が結構キツイ感じです。胸は３人の中で一番小さいです。

ｅｊｇｔさん感想ありがとうございます。
ロリは自然の摂理なんです。どんな作品にもロリはたぶんいます。
と言うより、ロリとか少女とかカワイイデス

誰か、灰君や忽滑の絵描いてくれないかな・・・（チラチラ

ではまた、次回

誤字訂正と感想待ってます！
感想があると作者のやる気がアップします

拾陸話　大和の神　3（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

拾陸話　大和の神　3

地響きの様な音が聞こえた場所には、巨大なクレーターが出来ており、
その中央には、スサノオが立っていた。

「一瞬三途の川が見えたぞ・・・」

スサノオは口調が素に戻っていた。
それほど、危なかったらしい。

「すまんな、スサノオいつもこんな感じで話してくれればな・・・」

「それは、出来ない相談ね。」

スサノオはまた元の口調に戻っていた。

「気持ち悪いな・・・まぁ、いい。灰と戦ってくれないか？」

「ん？いいわよお」

スサノオ達が会話している間、灰は半分くらい寝ていた。
そのため、起こすときに、オンバシラが飛んできたのは言うまでもない。
その後、スサノオ、灰の二名は、戦うため、庭にでた。

「両者能力有り、武器有り、の制限時間無制限、ただし即死級の攻撃はしないこと。
ただし、スサノオは草薙剣の使用禁止」

「わかったわよぉん」

「分かった。」

「では、始め！」

神奈子の声と共に、二人の戦いが始まった。
先に動いたのは、灰で在った、腰に刺してある炎剣「炎神」を抜き放った。

「はぁぁ！」

居合い抜きの要領で、横薙ぎに一閃した。
その瞬間、「炎神」から淡い橙色をした、斬撃が放たれた。

「甘い！」

スサノオはその斬撃を片腕で、止めるとそのまま灰に接近し、胸の当たりを殴り飛ばした。
灰は後ろに飛ばされた。
空中で、回転しながら猫のように着地した灰は、「炎神」自体に赤い炎を纏わせスサノオの攻撃を待った。

「しっ！」

スサノオは両腕をフルに使い、無双突きと言っても過言ではないほど灰を殴った。
灰は、刀で防いでいたが、それも最後まで続かず、数発体に受けてしまった。

「ぐ・・・さすがにきついな・・・」

スサノオから離れるように飛び、空中から大量の炎の塊を落とした。

「そんな程度で、沈むはずがなかろう！」

そんなスサノオを見て、灰はキャラ変わりすぎだろうと思いつつ、先ほどの炎に混ぜて投擲した「炎神」の中にある術式を発動させた。

瞬間

轟音が鳴り響き、「炎神」を中心に赤い炎の火柱が出ていた。神奈子らが張った結界をいとも容易く破壊し、屋敷まで火が燃え移った。

スサノオはと言うと、黒焦げになっていた。

拾陸話　大和の神　３（後書き）

更新遅れてすまんです。
ちょっと色々考えてましてｗ

ｅｊｇｔさん地海月さん感想ありがとうです。
ｅｊｇｔさんサブヒロインはいっぱい増やします。
だって、ハーレム目指してますから（キリ

地海月さん
死んだから闇魔。
何故ばれたしｗ
いや、まぁ気づきますよねーｗ

次回、諏訪大戦前夜お楽しみに！

次回予告、やって見たかったんだ・・・

誤字訂正と感想そして後指摘、待ってます！
感想があると作者のやる気がアップします

拾漆話　諏訪大戦前夜（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

拾漆話　諏訪大戦前夜

「こんなものか――」

灰が言いきる前に、オンバシラが当たり有りえない速度で星になるんじゃないかと言うほど飛んで行ってしまった。

「八咫烏、分かったろ、これが炎神不知火の力だよ。」

「ああ」

「２００年前、あの髑髏殺した張本人だからね。」

「そうだな、あのときの黒い火柱・・・アレは一体なんなのだろうか？」

「さぁ？其れは本人に聞いて見ないとわからないさ」

「それもそうか」

「ま、そんなことより大戦前夜だし、宴会するか！」

そう言うと、神奈子は他の神に宴会をやることを伝え、宴会を始めたのであった。

「やっと・・・帰ってこれた・・・」

灰は直線距離にして、約千里も飛ばされていた。

「帰ってきたのかい。」

「当たり前だろう・・・一応大和の神なんだからさ・・・」

灰は神奈子の隣に腰を落とし、酒を飲み始めた。

「そういやさ灰は、全然酔ってないよね、前の宴会ん時も酔ってなかったし」

「酔ってはいるぞ、ただ自分の能力が毒と判断して燃やしてるみたいだ。」

なるほどねぇと神奈子は赤い顔で関心していた。
そんな二人の所にふらふらと覚束ない足取りで天照がやってきて、灰の胸に飛び込んだ。

「かーいー。」

「危ないぞ、天照」

「さすが、灰全然動じないね」

灰は動じていないわけではなかった。
飛び込んだと言うことは、天照の豊満な胸が当たると言うことなのだ。
それに加えて、天照は服が肌蹴ていたため、ほとんど生の感触が伝わってしまっていたのだ。

「動じないわけないだろう・・・」

「そうだよね、天照の胸はおっきいからね」

そしてそのまま灰をからかうのかと思ったが、ふと何かを思いついたようにし、天照を灰から引き剥がして何かを耳打ちしていた。
そんな神奈子たちの様子を見ながら灰は、一人酒を飲んでいた。

少し経って、神奈子と天照がニヤニヤしながら戻ってきた。

「どうした、二人とも？」

「灰の能力ってなんだっけ？」

「『ありとあらゆるモノを燃やす程度の能力』だが」

もう片方は話さない方が得だと灰は判断したため黙っていることにした。

「でさ、能力が勝ってに酒燃やしちゃってるんだよね？」

「ああ、そうだけど。それがどうかしたか？」

「だったらできるな。」

何の事かまったく灰は分からなかったため、とりあえず流されてみることにした。

「くーらーえー」

天照がそう言いながら神力の塊のようなものをぶつけてきたため、反射的に燃やした。

「な、なにするんだよ、あま・・・・ッ」

気づいた時には、神奈子が背後におり呪符の様なものを貼り付けられ、その呪符は灰の体にしみこむように吸い込まれて言った。

「何をした！？」

「ただ、酔えるようにしたのさ。」

「ダメだった？」

天照が上目遣いで聞いてきたため、ほとんど反射的に「ダメじゃない」と言ってしまった。
小さな声で神奈子が永遠に・・・と言ったのを聞かずに。

「ま、飲もうじゃないか！」

「ああ、そうだな」

「のむー」

灰、神奈子、天照はまた飲みだした。

そのころスサノオと八咫烏はと言うと

「スサノオ大丈夫？」

「ああ、儂ももっと修行せねばな、本気でなかったとは言え・・・」

「大丈夫、十分強いわよ」

八咫烏にいつものような冷たい感じは無くなっていて、乙女のような様子でスサノオと話していた。

拾漆話　諏訪大戦前夜（後書き）

とりあえず。あれですね。
灰君うらやましいです。
天照さんに抱きつかれるなんて・・・

因みにですが、スサノオさんはちゃんとした服着て髭剃るとダンディなおじ様です。
まぁ変態さんですが。

e.jgtさん七夜士郎さん感想ありがとうございます！！

e.jgtさんまぁオンバシラはね・・・灰ェ・・・

七夜士郎さんスサノオはキモイですがやるときはやります・・・たぶん

と言う訳で諏訪大戦に行くまで長くなりましたが、次回諏訪大戦です。

ではまた、次回

誤字訂正と感想そして後指摘、待ってます！
感想があると作者のやる気がアップします

拾捌話　諏訪大戦（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

拾捌話　諏訪大戦

湖の辺。
八坂神奈子率いる大和勢が集まっていた。
対して、洩矢諏訪子率いる土地神勢は、洩矢神社の境内で待機していた。
そんな中、大和勢の大将である、八坂神奈子は大和勢から少しでた。

「洩矢諏訪子！そちらの国を明け渡して貰おうか！」

その声に反応し、洩矢諏訪子と思われる人物が神社の上空へと飛んだ。

「八坂神奈子！！そんな事は絶対にさせん」

洩矢諏訪子の声と同時に戦争が始まった。

「凄いな・・・いくらこっちの下級神だからと言っても、そこまで弱いわけじゃないはずなんだが・・・」

いや、ミシャグジが強いのか？
などと、思考していると灰に向かって高速で飛んでくる妖力を感じた。
その妖力を感じて直ぐ誰か理解した。

「元気だったか？忽滑。」

「灰、久しぶり。挨拶も良いんだけどさ、私一応諏訪子の味方なんだ。」

「ま、みりゃ分かるさ。」

「だから、倒させて貰うよ！」

そう言うと忽滑は会話中に準備させておいた、術を発動した。

「ッ！？」

灰は何か仕掛けて来るだろうとは、思っていたが予想外だった。
なんせ、忽滑が骨で作ったモノはそう。

髑髏だったのだ。

２００年前灰と共倒れした、髑髏。
その髑髏を作り出したのだ。

「実は能力発現したんだ、『あらゆる空想を実現する程度の能力』
って言うんだ」

内心反則だろう、と毒づきながらも灰は髑髏から投擲されている、
骨の弾丸を紙一重で回避していた。

「白骨した竹林」

技名を忽滑が言うと、其れと同時に灰の足元から白い骨で出来た竹が生え始めた。
その成長速度は速く、灰の周り全てを竹林が覆ってしまった。
そのまま、白い竹林は爆ぜるはずだった。

「成長したな！忽滑！」

灰は自分の周りに赤い炎の火柱を作り、竹林の一部を燃やして上空に躍り出た。
そのさい、灰は背中から、赤い炎の翼を広げ、羽ばたいていた。

「次はこっちから行くぜ。」

そう言って右手を上げ、手のひらを空に向けて開いた。

「アマテラスの太陽」

宣言と同時に、灰の手のひらの上に炎が集まりだした。
マズイと感じた忽滑は灰を止めるために、髑髏を灰に突進させた。

髑髏がぶつかるよりも少し早く、灰の技は完成した。

完成した瞬間作り出された太陽で小さな爆発が起こった。
その余波だけで、髑髏は右半身を消し飛ばされてしまった。

「あ、有りえない」

忽滑は感じていた、灰を頃死に来たときと同じ、絶対に勝てないと言う確信を。

「こ、降参するわ、髑髏を消された時点で私の負けよ」

灰は其れを聞くと太陽を消し、忽滑の元まで降りてきた。

「いや、成長したねー」

ぐりぐりと忽滑の頭を撫でると、少しうれしそうに忽滑は顔を赤くしていた。

「そういやさ、忽滑は何で負けを認めたんだ？」

撫でながら聞くと、忽滑は空想を実現する程度の能力は、一日一回の発動が限界と悔しそうに言った。

「そっか。とりあえず、神奈子んとこ行くかな」

「私もいくよ」

神奈子の神力をたどっていくとなぜか、戦いは終わり。

大和神と土地神たちは宴会を開いていた。

「「え？」」

「かーいー」

前の宴会と同じように、酔っ払った天照が灰の胸に飛び込んだ。

「ぐぇ！？」

少し呆然としていたせいで後ろに吹っ飛んだ。
吹っ飛ばした天照は、灰を放置して、神奈子たちの方へ戻って行った。

「な、何が起きたの・・・？」

忽滑だけは、まったく分かっていなかった。

飛んで行った本人の灰は、なぜか着地地点に開いていた、中に目玉が無数にある穴に落ちていた。

拾捌話　諏訪大戦（後書き）

忽滑のあらゆる空想を実現させる程度の能力とは
魂のない生物や、無機物を半永久的に生み出せる能力。
忽滑自身の空想あるいは妄想力は結構低いため、一日一回が限度。

と言う訳で、諏訪大戦でした。
なんと言う急展開。
ま、いつもの事ですが・・・

ｅｊｇｔさん感想ありがとうございました。

確かにＮＴＲそう。
だけど、あくまでメインヒロインは映姫です。
作者が揺るがなければ・・・・

では、また次回！

誤字訂正と感想そして後指摘、待ってます！
感想があると作者のやる気がアップします

拾玖話　八雲紫（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

新作小説「東方世界を求めた者が幻想入り」書きましたので、よかったらそちらもどうぞ。

拾玖話　八雲紫

「どこだ、ここ」

天照に吹っ飛ばされて、気づいたら屋敷の中・・・どういうことですか？

「あら、起きたのね。」

声のした方を見ると、金髪で胡散臭い笑みを浮かべた女性が立っていた。

「誰だ？・・・美人な妖怪さん」

「助けて差し上げたのに、誰だとはねぇ、炎神不知火さん」

胡散臭い本当に胡散臭い。
もう少し素直なら今の残念美人から脱出できるのにな・・・

「あら、ひどい」

「あー、しゃべってたか・・・すまんな」

「いえいえ。」

うふふと女性は笑った。

「ま、俺の名は知ってるかも知れんが、不知火灰だ。炎神をやってる」

「私は、隙間妖怪をやっている、八雲紫ですわ」

隙間？と灰は頭をかしげていると、八雲紫は右手の上にくぱぁと言う擬音と共に、スキマを開けた。

「気持ち悪いな、なんか背筋がゾクゾクする」

「あら、ひどい。」

「あと、胡散臭い」

「あらあら」

「このババア」

「・・・」

「で、八雲さんとやら、何で俺をこの屋敷に連れてきた？」

「ふん・・・」

無視である。
完璧な無視である。

「何で無視するし」

「・・・」

「あースミマセンでした。八雲紫さんは可愛くて美人で結婚したいくらいですー」

灰は話が進まないのは嫌だったので、適当に機嫌を取ろうと思って適当な事を言った。
だが、それがいけなかった。

「結婚ってずっと一緒にいると言うことでわよね？」

「そうだな」

「だったら、話は早いですわ。」

「え？」

「不知火灰、式になってくれますわよね」

・・・はい？
式って式神の事ですか？

「そうですわ、式神ですわ」

「だが、断る！」

そう言って灰は、背中から赤い炎の羽を生やし、飛び立った。
が直ぐに空中にスキマを作られ、八雲亭へと連れ戻された。

「嫌です、式神になりたくありません。ですから帰らせていッ――」

気づいたら灰は、手足をスキマに入れられ、宙吊りにされていた。

「おい！紫ィ何してる！」

「初対面のくせに、呼び捨て・・・まあ言いですわ、直ぐに貴方は
私の式になるのですから」

「え？おい、マジでやんのか！？」

「マジもマジ」

「ちょっとま――」

拾玖話　八雲紫（後書き）

今回は短めです。
いつも短いですが。

e.jgtさん感想ありがとうございます。
添い寝CD聞き直しました。
メインはやっぱ映姫様です。

では、また次回

あ、新作もよろしく！！

誤字訂正と感想そして後指摘、待ってます！
感想があると作者のやる気がアップします

弐拾話　八雲亭（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

弐拾話　八雲亭

「うふふ、これで炎神不知火は私のものよ。」

うふふと紫は何か身の危険（性的な意味で）を浮かべていた。
対して灰は、自分の中に紫の妖力が少量ながら紛れ込んでいたので、
完全に式神になったのかと悲愴感に打ちひしがれていた。

「でー、紫よ、何で俺を式にしようと思ったんだ？」

「何でって、貴方の事が好きだからにきまってるじゃない」

「・・・へ？」

一瞬灰は何を紫が言っているのか、まったく分からなかった。
あまりにも当然でしょみたいに言うものだから、全然理解が及ばなかった。

「えっと・・・何時からでしょうか？」

「何時ねぇ・・・貴方の神社からですわ」

そう言うとまたうふふと紫は笑い始めた。

「とりあえず、今日は何もしなくていいわ、私といちゃいちゃするか、お茶でも飲んでいて」

そう言って紫は両手を広げて、あかたもいちゃ付きましょうと言う感じだったが、灰は無視した。

「紫、お茶はどこだ？」

「えーいちゃつきましょうよ」

そう言いながら灰の身体にしなだれかかってきた。
そのさい、豊満な胸を押し付ける形になり、少し灰は顔が赤くなった。

「照れちゃってかっわいいー」

「てめ、からかうんじゃねえ！」

それから紫と二人で騒いだ後、時間も深夜になったため、寝ることになった。

「で、紫なんで俺の布団にいるんだ？」

「言ったじゃない、私は灰の事が好きなの」

「はぁ・・・好きにしろ」

「もちろん」

語尾に音符が付きそうな感じだな・・・

灰はそう思い寝ようとした。

うとうとし始めた頃に、紫が口付けをしてきたのだ。

「なッ！？」

「うふふ、いいじゃない」

「いやいやいやいやいや、何がいいんだよ」

灰は否定したが、さすがに誘惑には勝てず・・・

甘い夜を楽しんだのであった。

数日後

「ねぇ灰。」

「なんだよ、紫？」

「貴方苗字八雲に変えない？」

「嫌だね」

「だったら、私が不知火紫って名乗ろうかしら」

「それだったら・・・むー」

「いいじゃない、不知火紫ぴったりだわ」

そのまま紫は妄想の彼方へと飛んで言ってしまった。

数時間後

「灰。」

いつも浮かべている胡散臭い笑みを止めて、紫は真剣な表情だった。

「どうした？紫。」

「私、夢があるの。」

「どんな夢だ？」

「妖怪と人間が共存する世界。」

「・・・いい夢じゃねーか」

「笑わないの？無理だって言わないの？」

「紫が無理だって思ってるんなら無理だろうが、お前はそう思ってねぇんだろう？」

「当たり前じゃない」

「なら、無理じゃねぇし、俺は人の夢笑うほどえらかねーよ」

そう言って灰は笑っていた。
その日の夜は激しかったそうだ・・・

「紫、俺旅出るわ」

「え？」

「だーかーらー旅出るって」

「させないわ！」

紫は本気で行かせたくないのか、そこら中にスキマを開いた。

「俺に、勝てると？」

その瞬間、灰からはいつも感じるような微弱な神力、霊力とは違って圧倒的なまでの霊力と霊力には劣るが大量の神力を開放した。

「く・・・」

一瞬紫がクラッとしたのを見逃さず、灰は赤い炎の羽を展開し、飛び立った。

「灰戻ってきなさい！」

紫は式神に命令を出した。

「残念、式神程度では俺はしばれんよ」

高らかに笑いながら、灰は飛んで行った。

しばらく飛んで、灰はどこに行こうか迷っていた。

「よし、とりあえず西へ行こう」

そう言うと、灰は大陸まで飛び其処からは半人半神と言うところを生かして、人の部分だけ、押し出して人間と言うことにして旅を開始した。

弐拾話　八雲亭（後書き）

紫との日常な感じの話です。
やっぱり急展開・・・
さきにすすめたいと言う気持ちが勝ってしまって・・・ガンバロウ

感想ありがとうございました。

ｅｊｇｔさん
ゆかりんは好きです。
映姫様の次の次の次位に好きです。
あの胸でパフパフしたいｄ・・・ゲフンゲフン

では、また次回
東方世界を求めた者が幻想入りこちらの方もよろしくお願いします。

感想などお待ちしています。

弐拾壱話　西方の地にて（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

弐拾壱話　西方の地にて

「むぅ・・・衝動的に西へ来てしまったがやる事が無い」

はぁとため息を付きながらトボトボとあるっているのは、不知火灰。
今は炎神ではなく、神の部分を極端に抑えて９割方人間である。
ただし、他の神や大妖怪などには簡単にばれてしまう。

「其処の神様暇そうだね、よかったら助けてくれないかい？」

頭上から唐突に声をかけられた。

「ん？」

そこに居たのは、金髪で紅い目をした物腰の優しそうな２０歳位の男だった。
顔立ちは綺麗で、違う方向から見ると女に見えてしまいそうな感じであった。
その男は人間では無かったが。

「私を助けてくれませんかね？神様」

「別にいいが・・・」

灰は少し戸惑ってしまった。
その男は、巨大な十字架に串刺しにされていたからと言うわけではなく、その男から感じる妖力は紫と同等程度だったのだから。

「あ、申し送れました。私、始祖の吸血鬼、クラシス・ファルモーデ・ペンタゴンと申します。気軽にクラシスとお呼びください。」

灰、は十字架を炎剣で切断しつつ簡単な自己紹介をした。

「俺は、不知火灰、ただの半人半神だ。」

直ぐに十字架は切断でき、そのまま灰はクラシスを焼かない様にし、十字架だけ燃やし尽くした。

「便利ですね、その炎。」

「まぁ、能力だしな。」

「おお、能力ですか私も持っていますよ『存在を操る程度の能力』です。」

「俺は、『ありとあらゆるモノを燃やす程度の能力』だ。」

「そうです、暇なのでしょう。だったら私の屋敷にきませんかね？」

その申し出は灰に取ってはうれしいものだった。
たぶん暇つぶしにもなる上に、運がよければ今日の宿も確保できるのだから。

「行こう行かせて貰うよ。」

「断られたらどうしようかと思っていましたよ。」

ふふとクラシスは笑いながら、こちらです。と言って歩き出した。

しばらく歩くと城のような物が見えてきた。

「見えますかね。あれが私の屋敷です。」

ニコっと爽やかな笑顔と共に指を刺した方向は、その城だった。

「アレは屋敷と言うよりは、城じゃないか？」

「いえいえ、城ではありませんよ。私は王族でもなんでもないただの吸血鬼ですから。」

「始祖なのに？」

「始祖なのに。」

と言う意味の無い会話をしていると、クラシスの屋敷の門の辺りまで着いた。

「では、招待しますよ。灰さん。我が屋敷へようこそ」

ギィと言う音と共に門が開いていくと、其処には・・・

「これは・・・凄いな」

色とりどりの花が満開で、物凄く綺麗な風景だった。

「凄いしょう。これは私のメイドがやった仕事ですよ。」

「ホントに凄いな。」

灰が関心していると、遠くからクラシス様ーと言う声が聞こえてきた。

「クラシス様、お帰りなさいませ。」

「ああ、ただいまエリス。」

「そちらの方は？」

「俺は不知火灰。職業は炎神だ。」

エリスと呼ばれた子以外にも、奥から続々とメイド服を着た少女が出てきた。
出てきた少女は全員、なんと言うんだろうか。
幼女だらけであった。
クラシスは囲まれて恍惚な笑みを浮かべてデレデレしている。

「クラシスは、幼女好きか・・・」

「な!?ち、違いますよ!灰さん!!」

俺は、出来るだけ暖かい目をしてクラシスの肩に手を置いた。

「人の趣味は人それぞれさ、俺は別にクラシスを否定はしないよ。」

「だから、違うって!幼女好きじゃないってえええええ」

必死すぎてキャラが崩壊し始めたクラシスはそのまま、屋敷の方へ走り去って行ってしまった。

「えー・・・」

客人・・・いやこの場合は客神か、そんな事はどうでもいいとりあえず、俺を放置するなよ・・・

「えっと・・・灰様？案内しますので付いてきてください。」

それからメイドさんに連れられ屋敷を案内された。
結論を言えば物凄い広かった。
その後客室にいてくださいと言われたので、大人しく腰に刺している刀の手入れをすることにした。

「灰様、夕食の時間ですのでおいでになってください。」

手入れに力を入れすぎたらしく、日はもう沈んでいた。

「ああ、分かった。」

「とりあえず、クラシス・・・食事中位自重しろよ。」

夕食の時クラシスと会ったがクラシスは膝の上に幼女メイドを乗せて食べていたのだ。
この変態が。

「灰さん・・・いや灰。私は幼女が大好きだよ。だから自重とかもうしない私は私の道を行く!!」

「カッコよくねぇ宣言してんじゃねぇ!?」

「今夜は私の部屋に来るなよ! いいか絶対だぞ!」

「え? 振り? 振りなのか!?」

クラシスはハハハハと高笑いしながら、食堂から出て行った。

深夜

灰はとりあえず興味本位でクラシスの部屋の前に訪れた。

「振りだ、振りだよな？」

自身の能力で気配を燃やし、自分の周りに神力霊力遮断結界を張って、クラシスの部屋を覗いた。

しばらく覗いて、なぜか脱力した、灰は一目散に客室へと向かった。

内心灰は、ある意味尊敬していた。
クラシスは見た感じ１０Ｐしていた、たぶん見えてないとこにもいるのだろうよ。

それとクラシスは能力で自分の存在を操って増やしていた、こんな事に能力使うなよ。
と灰は思いつつ、客室に着き次第直ぐ寝た。

弐拾壱話　西方の地にて（後書き）

今回はオリキャラ登場です。
クラシス・F（ファルモーデ）・ペンドラゴン
クラシス俗に至上最強のロリコンです。

クラシスさんの能力とは能力　存在を操る程度の能力
存在を操る程度の能力とは
自身が触れている存在を操れる。
無機物であれば、無限に魔力も同じく。
存在を操るとは、たとえばただの剣の存在を操って、必中に出来たり、不死殺しを追加させたりと
大概チートである。

と行った感じです。

e.jgtさん七夜士郎さん感想ありがとうございました。

e.jgtさん

この際だから言おう映姫様は灰が、幻想入りするまで出てこないかも・・・
出したいんだけどね・・・
く・・・

七夜士郎さん
やはり同士がいたか！！

ではまた次回！
たぶん明後日更新！
感想等お待ちしています！

弐拾弐話　誤解（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

弐拾弐話　誤解

「血が吸いたい。」

クラシスは久しくそう思った。
激しい運動の後だからだろうか、ありえない位の吸血衝動に襲われたのだ。
昨晩はクラシスが襲ったのだが。

「どうしようか・・・家のエリスとかのはダメだ、あの子たちは・・・」

考えていると、ふと思った灰がいるじゃないかと。
神と人間の混血さぞうまい血だろうとクラシスは考え灰のいる客間へと向かった。

「・・・昨日の夜は何も見てない。俺はただ、寝てただけだ。」

灰は自身にまるで暗示をかける様に何度も繰り返していた。
昨日、灰はクラシスの部屋を覗きに行ったあと、考えていたのだ。
もし、俺が見た事が知られてクラシスがキレたらと。
そうなったら、戦いは避けられないだろう。
・・・たぶん。
クラシスはキレて回り見えてないだろうし、と。
だが暗示を自分にかけていても何も始まらないそう思ったため、灰は庭にでも行こうと思って、部屋をでた。

「よう、灰。」

部屋の外にいたのは、クラシスその人であった。
昨日の温和そうな雰囲気はなく、殺気が滲み出ていた。
その瞬間灰は悟った、昨日の覗きがバレていたのだと。

「いやー今日はいい天気だし俺は、庭見てくるよクラシス。」

逃げられるとは思っていない灰だが、とりあえず狭い廊下からは出たかった。
自身の武器である刀は狭いところでは使い辛い、能力に至っては屋敷が燃えそうなので論外
故に外ならば、と窓から飛び降りた。

「まぁ、待てよ灰。」

飛び降りた瞬間腕を掴まれて、宙吊り状態に灰はなってしまった。
このままでは、不味いと思ったので、腰に刺してあった『炎神』を抜くと、自分の腕を切断した。
切断した腕は一瞬で灰(はい)になり、地面に舞い落ちた。

「すごいねぇ」

眼をギラギラさせたクラシスが降りてきた。
手には、無銘ではないであろう魔力の込められた深紅の槍が握られていた。
自分が一度死なないと腕が復活しないため、左腕を失った灰は右腕のみで戦うため、どちらが優位かは一目瞭然であった。

「火炎弾！」

先に動いたのは、灰であった。
自身の能力を使って赤い炎の弾幕を張った。
少しは時間稼ぎになるだろう、そう思って放った弾幕はクラシスに当たったと同時に跡形も無く消えた。

「な――！？」

「私の能力を忘れたか？」

クラシスの能力は『存在を操る程度の能力』である。
ならば簡単自分に触れた物体は消えるように操ればいいのだ。

「反則すぎだろう・・・」

「こちらも行くぞ。」

クラシスは灰に向かって手に持っている深紅の槍を投擲した。
灰は其の槍を空中に飛んで回避した。
瞬間、槍は行き成り空中にいる灰へと進行方向を変えてきた。
そのまま槍は灰の心臓を貫いた――

「必殺の効果を付けたのは正解だったか、ただの魔力が込められた槍でも必殺になる。」

そういいながらクラシスは灰のしたいのそばまで行くと、首筋に噛みついた。
が、歯を立てる瞬間に灰は灰(はい)になった。

「む？」

徐々に灰(はい)は一箇所に集まりだし、灰の形を作っていった。

「ま、腕が復活したわけだし、よしとするか。」

完全に無傷な様子で灰は立っていた。

「もう一つの能力・・・ですか。」

「そうだ、『死んでも灰になって生き返る程度の能力』だ。」

「なら、不死殺しの概念を――」

「因みに俺は不死じゃなくて、死んで生まれ変わるんだよ。」

元の身体元の意思にだがな。と灰は付けたした。

「どっちが反則だよ・・・」

「出来るかわかんねぇけどやってみるか。」

灰はそう言うと『炎神』を鞘にもどした。
灰がまだ人間だった頃持っていた刀銘を『不知火』その刀は主人である灰が死んだと同時に灰の中に宿ったのである。
そして灰の中にある『不知火』と言う刀に能力の真髄と言ってもいい黒い炎を封印されてしまっていた。
理由は至極簡単刀には能力があった。
『封印する程度の能力』と言うものがある。

灰は空中に右手を掲げた。
一瞬、灰の周りに朧げな黒い炎が見え、右手には刀身が黒く、黒くて薄い炎を纏った刀が現れた。

「やってみるもんだなぁ・・・気合で。」

「さて、クラシス殺しはしないがちょっと痛いぜ。」

無造作に刀を横に一閃。
離れた場所にいた、クラシスをいとも簡単に切り裂いた。
傷口からは、黒い炎が湧き出し、両断された下半身は燃え尽きた。

「これが俺とお前の実力の差だ。」

クラシス自身は驚愕していた、自分は始祖の吸血鬼である。
だからこそ、神で在ろうとも引き分けぐらいには出来ると思っていた。
だが、現実は違った。
いとも簡単にやられてしまった。
灰が本気ならば最初の時点で死んでいたと。

「まぁさ、昨日俺がお前たちの夜伽を覗いたのは悪いと思ってるが・・・」

「へ？お前覗いてたのか！」

「え！？気づいてなかったの！？じゃあ何で俺を襲った！！」

「吸血衝動がでてな。」

じゃあ墓穴を掘ったと言うことか・・・？
俺は・・・
灰は先ほどよりも全力で逃げようとした。

「何処へ行く？」

灰の肩をクラシスが掴んでいた。
もの凄い笑顔で・・・

「な、なんで・・・下半身燃やしたのに・・・」

「始祖の吸血鬼なめんなよ。」

灰はクラシスにひきづられながら屋敷の中に強制連行された。

灰は説教と言うなの拷問を受け、これから３００年を執事として過ごすということで話がまとまったらしい。
もちろん灰自身の要求は全て却下されたのだが。

弐拾弐話　誤解（後書き）

クラシスとのバトルです。
まぁ無理やり感が半端ないですが・・・
と言うか、一体何時になったら灰君は幻想郷に行くのだろうか・・・
まぁ暖かい目で見てください。
お願いします。

それと、気がついたらもう７万ＰＶ嬉過ぎます！
ユニークも１万もうなんか嬉過ぎます！
１０万ＰＶ行ったらまた番外編かなとか思ってます！
そのときはまた、アンケートとりますのでよろしくです。

ｅｊｇｔさん感想ありがとうございました。
ニトロなプラスですか。
あの人ですね。
分かりますｗ
こちらの人もたぶん創造神の前でも言いますよＨＡＨＡＨＡＨＡ
其れと最近知りましたが、感想に返信機能あるんですね・・・

ま、まぁ不死鳥伝はあとがきで返信しますから！

では、また次回

感想、後指摘、誤字待ってます！

弐拾参話　執事も意外と悪くない（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

弐拾参話　執事も意外と悪くない

「はぁ・・・一応神様なんだけどなぁ・・・」

今灰は、絶賛掃除中なのだ。
まだ、執事を始めて五日目であるため、執事長のソロさんに仕事を習っている最中なのだ。

「俺が悪かったとは言え、３００年は・・・長い。」

逃げてもいいんだが、またどこかで会いそうな気がするから逃げないほうういい気がするし・・・
灰はまたため息をつきながら掃除に励んでいくのであった。

「ソロさーん、終わりましたよー」

この部屋の掃除が終わったために、執事長のソロさんを呼んだのだ。
ソロさんのフルネームはソロ・ペンドラゴンクラシスに拾われたと言ってた。

「出来たのか？」

廊下からあるって来たのは、歳は見た感じ２５歳位で白い髪を後ろで束ねた男性だった。
歳は６０歳らしい。
若すぎだろう・・・

「出来ましたよ。」

「ふむ。」

ソロさんは部屋の隅々まで見ていた。

「灰。」

「なんですか？」

「汚れが残ってるじゃないか！」

瞬間、右アッパーが顎に入りそのまま弧を描いて飛んでいった。

神様だぜ・・・ただの人間がここまで強いのか？
た執事（バトラー）だからこれほど強いと言うのか・・・

「起きろ灰。もう一度執事としてを叩きこんでやる！」

「え！？」

「さあ、逝くぞ！」

「字が違う！？」

そのまま灰はずるずるとソロに連れて行かれた・・・

数時間後ボロボロの灰が発見された・・・

「クラシス、俺は一体何時までやるんだ？」

「後２６０年位か。」

「と言うより、俺はいるのか？」

そうなのだ、ソロさんとメイドさんたちで十分なのだ。
一応家事全般が出来るようになった灰だが、１０年もたったらほとんどいらないほどになってしまったのだ。

「い、いるんじゃないか？」

「露骨に目を逸らすなよ・・・」

「じゃあ、お前に仕事を与えてやろう！」

クラシスはそう言うと灰に指を刺しながら、宣言した。

「小さい女の子をつれてこい！」

瞬間数百本の針がクラシスの額に深々と刺さった。

「痛！？」

飛んできた方向を見ると、針を持ったソロさんとメイドさんたちがいた。

「そういや、ソロさんって人間？」

「んにゃ、半吸血鬼位か？吸血鬼の特徴はあんまりないな、吸血鬼の血そんなに入ってないとおもうし」

「へー。」

灰は自分と似てるなぁと内心思っていた。
半人半神と半吸血鬼・・・
やっぱり似てるな・・・

「で、本当の仕事は？」

「ああ、其れは風見幽香と言う女性を知ってるか？」

「いや知らないが？」

「そうか、その人物は危険人物らしいんだが、花の妖怪らしいんだ。
」

「あれか、屋敷の花畑をもっと綺麗にしたいから連れてこいと・・・
」

「そゆうこと。」

「場所は？」

「東の方」

えらくアバウトだな、と灰は思いつつ行くことにした。

「じゃ、着替えてから行くわ。」

「死ななければそれでいいぜ。」

灰は相槌を打ちながら、着替えに行った。
昔は灰色の着流しだったんだが、今は西洋の服を気に入ったらしく、黒いロングコートに中は黒を基調としたスーツのようなものを着ていた。
右目には丸い方眼鏡をかけて、現代で言うマジックとか出来そうな服装であった。

「行くか」

背中から赤い炎の翼を生やして、飛んでいった。

弐拾参話　執事も意外と悪くない（後書き）

今回は執事っぽい話でした。
あんまりしてませんけど・・・
次回は風見幽香の話だと思います。
でも、迷いそう灰君なら・・・

と言うか、私がこれ書いてるとき、深夜なんですけど、部屋が寒くて手が動かないんですよね・・・
アア、南の方に行きたいぜ・・・

感想ありがとうございました。

ｅｊｇｔさん。

灰君の血は凄くおいしいと思います。
神との混血・・・正確には違いますけど、同じようなものですからｗ
創造神の前でロリコン宣言・・・クラシスさんなら絶対するな・・・
うん。

感想はこのままで行きたいと思います！

ではまた、次回。

感想、後指摘、ご意見待ってます。

弐拾肆話　風見幽香（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

弐拾肆話　風見幽香

「綺麗な、花畑だ・・・」

灰は見ほれていた、自分の眼前にある黄色の小さな太陽のような花に。

「あら、うれしい事言ってくれるじゃない。」

「ん？誰だお前は？」

灰の後ろには緑の髪をして、傘を持った女性が立っていた。

「私は四季のフラワーマスターと呼ばれている風見幽香よ。」

「お前が風見幽香・・・よかったら俺の主のいる屋敷に来てはくれないか？」

「無理ね、貴方がいる限り。」

「俺が・・・いる限り・・・だと？」

「ええ、貴方は炎でしょ、私は花・・・相容れないのよ絶対にね。」

――――だから死んで頂戴

刹那、轟音が響いた。
傘の先を灰に向けたと同時に極太の魔力の塊が発射された、灰は反応できずまともに食らってしまい、上半身が拭き飛んだ。

「あぶねぇな・・・。」

光線が通った後には、悠然と佇む灰がいた。
なぜ、炎も使わに灰は無傷だったのかと言うと、それは『死んでも灰になって生き返る程度の能力』が関係している。
クラシスとの模擬戦で見つけた応用である。
生き返るときに灰（はい）になるのだから灰（はい）に成れるだろう、と言う至極簡単な理由だ。
そして、案の定出来たため、何時でも自分の身体を灰（はい）に出来る様修行したのだ。

「へぇ、一撃で殺そうと思ったけど・・・面白いわね。」

風見幽香は口を横に開き、ニタァと笑った。
瞬間、風見幽香は傘を振るった。
灰はとっさに後ろへ下がって回避した。
が、完全には躱しきれなかったため、右腕を失った。

「ッ・・・」

灰は焦っていた。
右腕を回復しない限りは負けると。
灰(はい)になる方法は使えない、あれは部分的には出来ないのだ、もともと生き返ると言うことなのだから。
生き返るとはつまり、身体を元の状態に書き換えると言うことだ。
それに回復し終わったと、同時に消されればまた復活そして消されるの無限に入ってしまう。
そうなるのは避けたい、其れは灰自身の精神を壊しかねないから、自分が何度も立て続けに死に続ければ絶対に狂うだろうと言う確信が灰には在った。

「どうしたのかしら？お得意の炎は使わないのかし・・・ら！」

風見幽香が傘で袈裟切りをしてきたため、瞬間的に腰にある刀『炎神』を抜いた、だが炎は纏っておらず、ただの丈夫な刀であった。
金属音が鳴り響いた、片や傘、片や刀と言う普通ならば傘が簡単に負けてしまうであろうだが、全くそんな気配はなく、刀の方が折れてしまいそうなほどの圧力であった。

「くッ・・・」

灰はそのまま風見幽香の力に負け、吹き飛ばされた。

「・・・なんなの？何で本気を出さないの？死にたいの？」

「なんでって・・・俺は・・・其処に咲いてる黄色の花が綺麗だと思ったから、枯らしたくねんだよ・・・お前だってそうだろうが・・・」

ま、死ねないんだけどね。
と灰は続けて言った。

灰が炎を使わなかった理由其れは黄色い花を枯らしたくなかったからだ。

「本気で・・・戦いたいなら、ここから離れて戦おう、出なければ俺は戦わない。」

「・・・いいわ、行きましょう。」

そう言うと、風見幽香は飛んで行った。
灰も一度体を灰(はい)にしてから、炎の翼を出して、飛んだ。

「仕切り直しといこうじゃねえか。」

灰が構えるのは一振の刀『炎神』
対して風見幽香が構えるのは、傘予測だが植物で出来ている傘だろう。

「ここなら私も本気を出せるし、最初から行くわよ『マスタースパーク』」

先ほどの光線がまた、放たれた。
灰は一度見ていた為か、避けるのは簡単だった。

マスタースパークが消えると其処には風見幽香はいなく、傘だけが浮いていた。
正確には、地面から生えている花のようなもので支えられている。

鈍い音と同時に灰の腹には風見幽香の腕が突き刺さっていた。

「クソ・・・が」

グチャと言う音と共に風見幽香は腕を抜いた。
そして灰は、前のめりに倒れ、灰(はい)に成った。
その灰(はい)は集まり人型を形成していき、灰となった。

「面白い能力ね・・・私がいくら嬲っても死ぬ事はないのね・・・」

うふふと風見幽香は不吉な笑いをしていた。
灰はと言うと、内心焦りまくっていた。
風見幽香との戦いは最悪黒炎も使わざるもえないだろうと。

それから幾刻だろうか時が過ぎ、辺りは既に暗闇に包まれていた。

「使うしかない・・・か。」

灰はそう言うと、手を天に向け何かを掴む動作をした。
何も無かった手には一振の刀が握られていた。
銘は『不知火』自らの能力の大半を封じた刀である。

「『黒花弁』」

暗闇の天に黒く、所々が真っ赤な花が七つ咲いた。
灰はもともと風見幽香との戦闘でもはや神力、霊力共に底を尽きかけていた。
それに加え、不知火の開放と大技、もはや消耗が限界を突破していた。
対して風見幽香は魔力は無くなりかけているものの、妖力自体はまだまだ残っていた。

「へぇ・・・綺麗ね、黒い花・・・」

「天より降り注ぐ七つの花弁」

「舞い散れ、そして燃やせ。」

天に浮いていた七つの花弁は砕け散り、其の破片は小さな花びらと成って舞い降りた。

その花びらは不知火灰、風見幽香を黒い炎の業火で包みこんだ。

「アハハハハハハハハハ、凄いわねぇ！！」

風見幽香は立っていた、身体の所々が黒い炎で燃えているにもかかわらず。

対して灰は、地面に倒れ伏していた、霊力、神力共に底を尽き、灰（はい）に成る事さえ出来なかった。

笑っている風見幽香を見ながら灰の意識は途絶えた――

弐拾肆話　風見幽香（後書き）

今回はゆうかりんとのバトルです。
全然うまく書けた気がしねぇ・・・
なんか色々詰め込んでごちゃごちゃに成った感じだ・・・

感想有難うございました。

ｅｊｇｔさん

クラシスはねー。
絶対即効で回復するね、アイツ主人公よりチートだもん・・・
いや主人公の方チートだな・・・

映姫様俺も恋しい・・・でも、まだあと少しやりたいイベントがあるんだ！

もこたんとかもこたんとかもこたんとか・・・けーねとか！！

ではまた次回。

ＰＶ１０万行ったらまた、番外編です。
今回は・・・何にしようか・・・

やっぱ映姫様か！そうだ、映姫様とのイチャラブ書こう！

一応ＩＦだけどね、本編じゃまだイチャラブしてないから！（ここ重要

感想、誤字訂正、後指摘等待っております。

弐拾伍話　藤原さん家の不比等君（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

弐拾伍話　藤原さん家の不比等君

風見幽香と戦ってから数百年が過ぎた。

「幽香は・・・考えるのは止めておこう。」

灰はクラシスのところでの執事を終え極東の国所謂日本に戻って着ていた。

「さて、神社は後で行くことにして、噂で聞いた美女だったか美少女だったかを見に行くとしますか。」

灰はそう言って歩みを進めていた。
一応灰は何時も来ていた、洋服を脱ぎ久々の和服を着ていた。
周囲が薄暗く成ってきた。
今日はここら辺で野宿かと思い、其の場に座ろうとしていた。

―――微かな声が聞こえた

「・・・どこから？」

小さく聞こえる音を頼りにその方向へと近づいて行くと、少女の悲鳴のようなものと戦闘音が聞こえた。

灰が付くと其処は酷かった。
大量の妖怪の死体と数人の人間の死体。

「く、も、妹紅・・・お前は逃げろ・・・私はもうだめだ。」

「い、嫌だよ！お父さん！！」

死にそうな男性の傍らで嫌だと泣いている少女がいた。

灰はゆっくりと、その親子に近づいて行った。

「ッ！？」

灰が近づいていくと、男性の傍で泣いていた、少女が泣きながら自分の父親に近づけないように灰の前へ立ちはだかった。

「お譲ちゃん・・・君のお父さんを助けてあげよう。」

「ほ、本当？」

「本当だ、俺は一応陰陽師なんでな。」

灰は神である事を隠し、そして自分を陰陽師と言うことにした、理由としては陰陽師ならばあまり不信に思われ無いし、それに色々と都合もいいからだ。

「大丈夫か？お父さんとやら。」

「ガハッ・・・私の事よりも・・・妹紅をここから離れさせてやってくれ。」

「ああ、離れさせるさ、お前を救った後でな。」

灰は治癒系の術を全く知らなかった。
自分の能力ではどうにも成らないし、かといって適当にやってはダメだ。
だから灰は自分の血を飲ませようと
だが、大量に飲ませすぎれば、死に至るであろう。
もともと神でもないし、半人半神でもない、ならば与える量には気を付けなければ成らない。

「お前、これ飲めるか？」

「お前じゃない・・・不比等だ・・・。」

灰はいいから飲めと言って、自分の血を少量飲ませた。
其の血には少なからず神力が宿っており、一番の致命傷であった、腹に開いた穴は灰の外側かの霊力の治癒効果と内側からの神力によってほぼ塞がり掛けていた。

そんな中複数の足音と、誰かを捜索しているであろう声が聞こえた。

「お譲ちゃんこの声わかるか？」

「ぐす・・・え？・・・分かる・・・家来だと思う。」

「よし、だったら直ぐ教えてきてくれ不比等はここだと。」

「分かった！！」

少女は駆けて行った。
不比等は傷が治ったとはいえ、先ほどまで死に掛けていたせいか深い眠りに落ちている様だった。

「さて、さっさと逃げるか・・・」

灰は足早に其処を去った。

それから直ぐ、少女と数人の人が来て、不比等は発見されたらしい。

「さて、都に着いたか。」

都に着いたからには、お金が無いと何もやっていけない。
何か仕事をしよう・・・

「誰かの家来とか・・・いい気がする。」

一応家事全般も出来るし、小さい子の子守も出来る、あと少しの書類仕事も。
これは完璧だ、と思い灰は使用人を雇いそうな屋敷を探して都をうろうろしていた。
その判断が幸運だったのか、はたまた不幸だったのか・・・

不比等は考えていた。
あの時私を救ってくれた、灰色の髪の毛をして、灰色の服を着た旅人はと。
それとあの後目覚めて自分の頭に浮かんできたもの。

『領域を司る程度の能力』

と言うものについて。

「能力に関しては追々だな・・・まずは旅人を探さねば成るまい。」

そう言って不比等は家の者に灰色の髪をした旅人を探せと命令した。

「あの、すみませんが、少しよろしいでしょうか？」

「なんですか？」

誰にも雇って貰えず途方にくれていた灰に一人の女性が話しかけてきた。

「貴方様は、昼間何をしていらしましたか？」

「昼間？」

灰は昼間助けた、不比等と妹紅と呼ばれていた少女を思い出した。

「んーまぁ、人助けかな？」

「そうですか。其れより貴方は旅人ですか？」

「そうですが？」

女性はそうですか・・・と言って少し悩んだような表情に一瞬なっ

た。

「では最後に、藤原不比等もしくは妹紅と言う名に聞き覚えは？」

「在るぞ。」

「そう、ですか、でしたら着いてきていただけませんか？」

女性は灰に着いて来いと言う。
灰は此れからの仕事も何もないので、これが何かの罠であっても灰にはあまり関係ないので行くことにした。

「分かったい――」

行こうと言おうとした瞬間見つけた！と言う声が響いた。
その声の元は黒髪で少しつり目気味な目で、元気のよさそうな少女であった。
昼間であった妹紅と呼ばれる少女だったのだ。

弐拾伍話　藤原さん家の不比等君（後書き）

ぐーやの話につなげるための、つなぎ話と言ったところです。

感想有難うございます。

ｅｊｇｔさん

映姫出したいでも出せない・・・

話の都合上出せない、なんでこんな展開にしてしまったんだ！

最近、普通に灰と映姫を一緒に旅させればよかったんじゃねと思い始めました・・・・

ではまた次回

感想、後指摘、等々待ってます！

弐拾陸話　藤原の人たち（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

弐拾陸話　藤原の人たち

「ぐぇ！？」

絶対に普段出ないような声が喉から絞り出された。
其の原因はもちろん、この黒髪で少しつり目気味な目の少女なのだ。

「あの時は有難う！お陰でお父さんが助かった！！」

「ああ、助かったのか・・・其れよりもどいてくれないか？」

灰の上には少女が乗っていた。
先ほど灰の胸に勢いよく飛び込んでそのまま押し倒したためだ。
内心灰は数百年前に会った、天照の事をほんわかと思い出していた。

「どくのかーどうしよっかな？」

「頼むからどいてくれよ、じゃなきゃ何も出来ない・・・」

「じゃあさ！私の家着てよ！」

「いや、俺はこの女の人に案内された家いくとこなんだが・・・」

「大丈夫ですよ、今から行く屋敷も妹紅様の屋敷も同じ所ですから。」

女性がそう言うと、妹紅と呼ばれた少女は多いに喜んだ。

其の後、妹紅が灰の上から退き、互い自己紹介をする事と成った。

「俺は不知火灰。ただのしがない・・・陰陽師さ。」

「私は藤原妹紅！だよ。よろしく」

物凄く明るい子だな・・・と灰は内心思っていた。

しばらく歩くと、妹紅の屋敷に着いた。

屋敷に着くと直ぐに藤原不比等がいる所に案内された。

「まずは、お礼を言わせて貰おう。助かった。」

不比等は本当に助かったと言う感じで頭を下げてきた。

「いやいや、死にかけている人がいたら助けるのは当然ですって。」

一応灰は相手は貴族と言うこともあってか、最低限の礼儀は使っていた。

「助けていただいたお礼と言ってはなんですが、不知火殿が迷惑で無ければこの屋敷で暮らしませんか？」

「本当か！？」

灰は凄く助かったと思っていた。
でも同時にこんなやり取りを少し前にしたなぁ・・・と言うことも思っていた。

「あと、俺を不知火様なんて呼ぶな、灰って呼び捨てでよべ。俺も面倒だから敬語使わないからさ。」

「ですが！」

「いいから！いいから。」

「分かりました、それでは灰殿は何故この都にいらっしゃったのですか？」

「ああ、其れは何でも絶世の美女だったか美少女だったかがいるらしいからだな。」

「其れでしたら、家の娘の妹紅でｓ」

不比等は最後までその言葉を言えなかった。
なぜなら顔を真っ赤に染めた妹紅が、軽く人を殺せるであろう壷で殴っていたのだから。

「何を言っているんですか！お父様！まったく・・・」

灰とであったときよりも落ち着いているようで、ちゃんとお嬢様みたいな雰囲気を放っていた。

「それと其の女性と言うのはたぶんなよ竹のかぐや姫ですね。」

「ふーん。」

其のうち見に行って見るかと灰は思っていた。

「見たいんだったら、近いうちに私が行くから一緒に行かないか？」

頭から血を噴出しながらも不比等は復活していた。

「お前、大丈夫か？」

「問題ない。私の『範囲を操る程度の能力』を使えばな！」

不比等は其の後凄く高笑いをしていた。

それから数日後、灰、不比等、妹紅はかぐや姫の所にいくのだが、今はまだあそこであんな事が起こるとは誰も思ってはいなかった。

弐拾陸話　藤原の人たち（後書き）

日常編スタートです。
次回は頑張ってギャグ回にしますので！

感想有難うございました。
ｅｊｇｔさん

そうなんですよ。つかなんで俺は一緒に旅をさせなかった・・・
そのあたりが悔しいぜ・・・

もこたんは親公認ですねｗ

もこたんかわいいよもこたん

でも映姫様の方が（ｒｙ

ではまた次回

感想、後指摘等待っております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9572v/

東方不死鳥伝

2011年10月26日03時04分発行